魔法少女リリカルなのは **～ 金色の魔物と天才少年～**

スザク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは

～金色の魔物と天才少年～

【Nコード】

N0467W

【作者名】

スザク

【あらすじ】

千年に一度行われる魔界の王を決める戦い。そんな過酷な日々を送る高嶺清麿とガッシュ・ベル。この二人を待っているのは東の間の休息か。あるいは相変わらず騒がしい日常か。

初期設定

時間軸設定

金色のガツシュウ！！編

コーラルQとの戦いでザグルゼムの新たな可能性を引き出した高嶺清麿とガツシュウ・ベル。

その後、魔界の脅威を語る魔物アースが襲来。新たな仲間となった魔物テッドと本の使い手ジードの協力により見事アースを撃退。

魔法少女リリカルなのは編

小学3年生の頃、ジュエルシード事件や闇の書事件に携わったなのは達は中学2年生に進級。特に事件は起きずに平穏な日々を過ごしている。

物語設定

この物語はStrikerS編へ移行する際、なのは達に清麿とガツシュウ・ベルとの接点を作るための出逢いである。

基本は戦闘は行わず平和な日々を共に過ごす。StrikerS編までの準備期間。

戦闘が全く無いという訳ではない。

補足説明

金色のガツシュ！！の単行本を参考とした人物・物語設定だが、アニメ・オリジナルストーリーも含まれる。

尚、物語の舞台はなのは達の世界である海鳴市。

主要登場人物

ガツシュ・ベル

千年に一度行われる魔界の王を決める戦いの魔王候補。魔界では落ちこぼれの弱虫であったが、人間界で魔界の頃の記憶を失い、清磨と出逢ったことで死闘の日々を送る。数々の強敵との戦いで強く逞しく成長し“優しい王様”を目指す魔物。

高嶺清磨

天才的な頭脳の持ち主。だが、その才能が孤独を作り、心を閉ざしていた。そんなある日、ガツシュと出逢い、共に苦難を乗り越え、多くの友達や仲間ができた。

高町なのは

小学3年生の頃、魔法を使う少年ユーノ・スクライアとの出逢いで魔法少女となった女の子。数々の事件と友達の支えがあつて立派な魔法少女として成長した。

フェイト・T・ハラオウン

小学3年生の頃、母親の願いを叶えるために魔法少女として戦うが、母親に裏切られ生きる意味を失った女の子。だが、なのはと出逢いが彼女を絶望から救った。

八神はやて

両親を早くに亡くし、孤独な毎日を過ごしていたある日、魔法と闇の書の守護騎士達と出逢う。だが、はやてを蝕む闇の書の呪いが事件を巻き起こす。そして、なのは達の協力と悲しい別れと共に事件は解決した。

アリサ・バニングス

気が強くて友達思い、魔法とは無縁のお嬢様。闇の書事件が解決するとなのは達から魔法のことを打ち明けられた。

月村すずか

優しくて大人しい、魔法とは無縁のお嬢様。アリサと同様に闇の書事件が解決するとなのは達から魔法のことを打ち明けられた。

注意点

“金色のガッシュ！！”や“魔法少女リリカルなのは”に特別な力アップリングのこだわりがある方はお勧めしません。

例：清磨×恵

清磨×鈴芽

ガッシュ×ティオ

なのは×ユーノ

プロローグ

（モチノキ町）

魔界の脅威を語る魔物アースを撃退した翌朝、清磨は普段通りに通学路を歩いていた。

清磨「（あの魔物、アースが言っていた“魔界の脅威”……バオウの力と謎の建造物。）」

そして、鞆から赤い魔本を取り出して第四の術、バオウ・ザケルガのページを開く。

清磨「（奴はバオウについても、あの建造物についても間違いなく何か知ってる筈……）」

【人間の方、貴公はバオウを普通の術と思っているのか！？】

【貴公達の目にはあれが建造物としか映らぬか！？】

【あれの本当の姿がわからぬか！？】

本を片手に歩みを止めずアースの言葉を思い出す清磨。

清磨「（あれが、ただの建造物でないとすると……）」

ガツシュ「清磨。」

清磨「……………」

しかし、思考を巡らすことに集中している清磨にガツシユの声は聞こえない。

ガツシユ「清磨……？」

清磨「（駄目だ。情報が少な過ぎる。ここはナゾナゾ博士に連絡を……）」

ガツシユ「清磨ッ！！」

清磨「っ！？」

遂に痺れを切らしたガツシユの叫び声が清磨を現実に引き戻した。

ガツシユ「聞いておるのか！？清磨！！」

清磨「わ、悪い悪い……………で、何の用だよ？」

歩みを止めて清磨はガツシユに向き直る。

ガツシユ「ウヌ、清磨に見てもらいたい物があるのだ。」

清磨「おいおい、また魔鏡の欠片とかじゃないだろな？」

清磨は以前ガツシユが海底で見付けた魔鏡の欠片を思い出す。

ガツシユ「ウヌウ…………それは分からぬが、とても綺麗な石なのだ。」

そう言つてガツシュがバルカン300の中から取り出したのは小さな白い結晶のような石だった。

清磨「へえ、綺麗な石だな。」

すると、迂闊にも清磨は興味本位でその石に触れた。二人の手が石に触れた瞬間、石は強い光を放つ。

清磨「なっ!？」

ガツシュ「又オツ!？」

眩い光が辺り一帯を包み込む。そして、光が消えた時には高嶺清磨とガツシュ・ベルの姿は何処にも無く、その場には清磨の鞆とガツシュのバルカン300だけが残されていた。

プロローグ（後書き）

感想、誤字・脱字、意見、評価などがあれば宜しくお願いします。

第1話

〔海鳴市 翠屋〕

PM4:00

現在、なのは達は学校帰りで喫茶翠屋に立ち寄っていた。

なのは「アリサちゃんとすずかちゃんも大変だよねえ。」

はやて「そやねえ、学校が終わって直ぐに稽古やもんなあ。」

フェイト「仕方無いよ。アリサ達も自分の将来のために頑張ってるんだから。」

今日は残念ながらアリサとすずかの都合が悪く、二人を除いたなのはとフェイト、はやての三人で放課後を過ごしていた。

レイジングハート

《Master・The magic reaction was perceived close-in.》

なのは「えっ、魔力反応？」

その時、レイジングハートが至近距離で魔力反応を感知した。

バルディッシュ

《In addition, the biological reaction was confirmed.》

フェイト「気になるね……」

真剣な面持ちでフェイトはなのはとはやてに同意を求める。

はやて「行ってみよか……?」

フェイト「うん。」

なのは「そうだね。」

そして、なのは達は魔力反応が感知された場所に向かった。

とある雑木林

清麿「う……………んっ……………」

光りの中で意識を失った清麿が目を覚ました。

清麿「ここは……………?」

赤い魔本を拾って状況を把握しようと辺りを見回す清麿。

清麿「っ!!!」

すると、すぐ傍で横たわるガツシュを発見した。

清磨「ガツシユ!!」

清磨は慌てて駆け寄りガツシユの体を抱き起こす。

清磨「おい、ガツシユ!! しっかりしろ!!」

ガツシユ「ウ……又ウ……」

清磨の呼び掛けでゆっくりと瞼を開いたガツシユも辺りを見回す。

ガツシユ「き、清磨……ここは何処なのだ?」

清磨「分からん。分からんが、また魔物が絡んでる可能性が高い。気を付ける、ガツシユ。」

ガツシユ「ウヌツ!!」

戦闘に備えて清磨とガツシユは気持ちを切り替え、辺りを警戒する。

なのは「動かないで。」

すると、突然聞こえた声と共に清磨とガツシユの体は特殊な光の輪に拘束された。

清磨「何っ!?!」

ガツシユ「う、動けぬのだ……」

そして、清磨とガツシユの前に現れたのは戦闘仕様の防護服に身を包んだ空飛ぶ少女が三人。

清磨「（に、人間？……いや、魔物か？）」

目の前の光景に困惑する清磨。

ガツシュ「か、か……か……」

清磨「（ガツシュ……？）」

ガツシュ「カツコイイのお！」

清磨「（……………）」

空飛ぶ少女達の姿にガツシュは目を輝かせる。そんなガツシュに清磨は呆れてしまった。

清磨「（……………と、呆れてる場合じゃなかった。）」

気を引き締め直した清磨は警戒を改める。

清磨「（今、拘束されてるということは少なからず連中は俺達の事を警戒してる筈だ。下手に動くのは危険か……）」

取り敢えず清磨は様子を窺うことにした。

ガツシュ「お主達！どうやって空を飛んでおるのだ！？私も空を飛びたいのだ！」

清磨「ええーい！！やかましい！少しは今の状況を考えやがれッ

！」

だが、未だに目を輝かせるガツシュに清磨は先程までの冷静さを失い、鬼磨と化す。

ガツシュ「す、すまぬのだ……」

なのは「……………」

フェイト「……………」

はやて「……………」

鬼磨と化した清磨の迫力にガツシュだけでなく、なのは達も気圧される。

なのは「え、えっと……ちょっと良いかな？」

清磨「えっ？あ、ああ……すまん。」

なのはの呼び掛けで清磨は我に返った。

フェイト「君達には少し事情聴取をしないといけないんだ。」

はやて「悪いんやけど、大人しくしとつてな。」

優しい口調でフェイトとはやては清磨達に投降を呼び掛ける。

清磨「……………」とは言われも連中の正体が分からん以上、油断はできん。せめて、この拘束だけでも……………！」

警戒を強める清磨は自分達も動ける状態にするべく魔本に心の力を込める。

清磨「第六の術、ラウザルク!!!」

呪文を唱えた直後、雷雲が出現してガツシユの身に落雷する。

清磨「ガツシユ!まずはこの拘束を引き千切れ!」

ガツシユ「ウヌッ!」

肉体強化されたガツシユは全身に力を入れる。

ガツシユ「ぬおおおおおおおおおッ!」

そして、拘束を強引に引き千切った。ガツシユは続けて清磨の拘束も引き千切る。直後、ラウザルクの効果は消えた。

なのは「やる気みたいだね。」

フェイト「そうだね……………」

はやて「気い付けるんやで……………2人共。」

拘束を強引に破った清磨とガツシユを見てなのは達は『抵抗の意志あり』と受け取ると臨戦態勢を取る。

清磨「ちょ、ちょっと待て!俺達は別に戦うつもりは……………」

レイジングハート

《Divine Buster》

なのは「シュ ト！」

清麿の制止の声は届かず砲撃を撃つなのは。

清麿「くそッ！ザケルガ！」

清麿は咄嗟に呪文を唱えるとガツシュの口から貫通力に特化した電撃を撃ち、間一髪で相殺する。

清麿「だ、だから話を…」

バルディッシュ

《Haken Saber》

フェイト「はッ！」

休む間もなくフェイトが清麿の後ろから鎌の斬撃で追撃する。

清麿「ザ、ザケル！」

迫る斬撃を指差して清麿は再び呪文を唱え、ガツシュの口から電撃を放って斬撃の軌道を逸らして避けた。

清麿「仕方ない……本腰入れるぞ！ガツシュ！」

ガツシュ「ウヌッ！！！」

覚悟を決めた清曆は魔本を持ち直して態勢を立て直す。その様子を見てなのは達も気を引き締め直して身構える。

清曆「行くぞッ！」

だが、掛け声とは裏腹に清曆はガツシユの体を抱えて進行方向を百八十度回転し、全速力で走り去った。

なのは「……………」

フェイト「……………」

はやて「……………」

清曆の予想外な行動に三人の思考は止まる。

なのは「……………」逃げた？

フェイト「……………」逃げたね。」

はやて「……………」逃げよつたな。」

二人の後ろ姿が遠くなるに連れてなのは達の思考は回復していく。

なのは「あっ！は、早く追い掛けなくちゃ！」

フェイト「う、うん！」

はやて「ま、待たんか　　い！！！」

正気を取り戻したなのは達は急いで清磨とガツシュを追い掛け始めた。

ガツシュ「き、清磨！？戦わぬのか！？」

清磨「当たり前だ！奴らが人間なのか魔物なのか分からん以上は迂闊に戦うことはできん！」

ガツシュ「ウヌウ……」

清磨「（そう……人間か魔物か。あるいは“別の何か”か。）」

走りながらも思考を止めない清磨は必死に打開策を考える。

なのは「止まって！」

清磨「ッ！！」

その時、一発の魔力弾が清磨の足元を狙い撃ち、清磨の足を止めた。

フェイト「逃げてても無駄だよ。君達に逃げ場は無い。」

はやて「観念しいや。」

なのは達は清磨とガツシュを完全に包囲する。

清磨「（もう追い付かれたか……）」

清磨は内心で焦りだしていた。地上を走る清磨達より空を飛べるな

のは達が圧倒的に有利なのだ。そして、なのは達はそれぞれデバイスを構える。

清曆「ま、待ってくれ！俺達は怪しい者じゃない！」

両手を挙げて戦闘意思がないことを必死に訴える清曆。

ガツシュ「ウ、ウヌ！その通りなのだ！私達はただ迷子になっただけなのだ！」

清曆「お、おいッ！なに勝手なこと言ってたんだよ！？」

ガツシュ「ウヌ、私達はここが何処か分からぬのだぞ！ならば私達は迷子であろう！？」

清曆「だから！そんな単純な話じゃないんだよ！」

だが、ガツシュの一言で次第に二人はなのは達に構わず口喧嘩を始めてしまった。

なのは「ど、どうしよう……………喧嘩始めちゃったよ……………」

フェイト「何だか事情がありそうだね。」

はやて「せやなあ、何か悪い人とは違うみたいやし……………信用してもええんとちゃう？」

子供のよう口喧嘩をする清曆とガツシュを見てなのは達は警戒を解いた。

清磨「そもそもお前は……」

なのは「えっと……ねえ君、ちょっと落ち着こようよ。」

清磨とガツシユの口喧嘩の仲裁になのはが入る。

清磨「えっ？……あつ！す、すまない。で、でも俺達は本当に怪しい者じゃ……」

なのは「それはもう分かったから落ち着いて。ねっ？」

清磨「あ、ああ……」

ガツシユ「ウ、ウヌウ……」

なのはの言葉で清磨とガツシユは少しずつ落ち着きを取り戻した。

フェイト「私達も別に君達に危害を加えるつもりはないから安心して。」

清磨「た、助かったあ……」

安心して緊張の糸が切れた清磨はその場に座り込む。

なのは「ごめんね、何だか私達がちょっと勘違いしちゃったみたいで。」

防護服を解除して制服姿となったなのはが手を差し伸べた。

清磨「あ、ああ……気にしないでくれ。そもそも最初に俺達が驚かしたことが原因みたいだしな。」

清磨はその手を掴むと立ち上がる。

ガツシユ「ウヌ、気にするではない。」

割と元気な様子のガツシユ。

なのは「それじゃあ事情を説明してくれるかな？」

はやて「なあ、どうせやったら翠屋で落ち着いて聞いたほうがええんとちゃっつ？」

フェイト「そうだね、私もそのほうが良いと思うよ。」

なのはが同じく防護服を解除して制服姿となったフェイトとはやてと相談した結果、詳しい事情を喫茶翠屋で聞くことになった。

〈喫茶翠屋〉

なのは「ただいま」

清磨達はなのはを先頭に翠屋の店内へ入る。

清磨「ただいま？」

フェイト「うん。実はね、この店はなのはの家族で経営してるんだ。」

なのはの発言を不思議に思う清麿にフェイトが説明した。

ガツシュ「ウヌ、何だか良い匂いがするのお……………」

清麿の隣で店内を嗅ぎ始めるガツシュ。

ガツシュ「ウヌツ！ケーキがいっぱいなのだ！」

清麿「お、おいコラッ！！ガツシュ！」

すると、匂いの出所を嗅ぎ付けたガツシュが清麿の制止も聞かずにケーキが並べられたガラスのショーケースに張り付く。

なのは「にやははっ、気にしなくて良いよ。ケーキなら直ぐに用意するから。」

清麿「い、いや……………さすがにそれは悪い気が……………」

フェイト「遠慮しないで。迷惑をかけたお詫びなんだから。」

清麿「そうは言っても……………」

はやて「人の厚意は素直に受け取っとくもんやで。」

なのはに続き、フェイトとはやても加わって清麿を宥める。

清麿「……………分かった。それじゃあ、お言葉に甘えさせてもらうよ。」

そして、なのは達は清麿とガッシュをテーブル席へ案内した。席順はフェイト、はやて、なのは。向かい側に清麿、ガッシュの順に座る。

はやて「ほな、まずはお互いに自己紹介からやな。」

全員の着席を確認したはやてが話を切り出す。

なのは「じゃあ私から行くね。私の名前は高町なのは。」

フェイト「私はフェイト・T・ハラオウン。」

はやて「うちは八神はやて。」

まずは魔導師組から簡単な自己紹介をする。

清麿「俺の名前は清麿。高嶺清麿だ。」

ガッシュ「ウヌ、私の名はガッシュ・ベルなのだ。」

互いに自己紹介が済んだ頃、一人の店員が注文を取りに来た。

桃子「あらっ、珍しいわねえ。なのはが同じ年くらいの男の子を連れて来るなんて。」

なのは「あっ、お母さん。」

店員の名前は高町桃子。なのはの母親であり、翠屋のパティシエでもある。

なのは「あれ？今日は厨房じゃないの？」

桃子「ええ、今日はお客さんも少なくて厨房は暇だから偶には接客でもしようかなって思ったの。でも……」

言葉を続けながら桃子は清曆に視線を移す。

桃子「何だかお邪魔みたいだから戻るわね」

気を利かせて他の接客に向かおうとする桃子。

なのは「お、お母さん！！注文忘れてるよ！」

桃子「あら、ごめんなさいね うっかりしちゃった。」

そして、桃子は清曆達に注文を伺うと直ぐに厨房に戻り、数分程度で注文の品を用意した。

桃子「ふふ、ごゆっくり」

そう言い残して桃子は再び接客に戻った。

フェイト「そう言えば清曆の制服んだけど、実はこの辺じゃ見かけない制服なんだ。」

はやて「そやねえ、確かに見覚え無いなあ。」

フェイトの意見にはやても同意した。

清曆「つまり、この辺じゃ俺達に繋がる手掛かりは無いという事か？」

なのは「うん、残念だけど……そう言うことになるね。」

用意されたコーヒーを一口飲んで訊ねる清曆になのはが申し訳無さそうに頷く。

清曆「一応確認するが、ここは地球の日本で良いんだよね？」

フェイト「うん、そうだよ。」

再度、確認を続ける清曆に今度はフェイトが頷く。

はやて「なんや随分と極端な質問やなあ……」

清曆「あ、あはは……」

はやての一言に清曆は苦笑いするしかなかった。

フェイト「私達はこの近くにある私立聖祥大付属中学校って所に通ってるんだ。清曆は？」

清曆「俺はモチノキ町にあるモチノキ第二中学校って所だ。」

ガツシュ「ウヌ、とても良い学校なのだ。」

用意された母のショートケーキを食べながら清麿の言葉に続くガツシユ。

なのは「モチノキ町……聞いたことのない町だね。」

はやて「学校も知らん名前やし……」

すると、なのはとはやては互いに顔を見合わせて困った表情をする。

フェイト「母さんに連絡して調べてもらった方が良いかな？」

なのは「そうだね、何か分かるかもしれないし。」

打開策としてフェイトの提案になのはも賛成する。

清麿「頼めるか？」

フェイト「うん、任せて。」

そう言つて携帯電話を取り出して電話をかけるフェイト。

フェイト「あ、もしもし……母さん？実は頼みたいことがあるんだ。」

電話が繋がると簡単に事情を説明した。

フェイト「うん　そう。　分かった。お願いね。」

話が纏まるとフェイトは電話を切った。

フエイト「すぐに調べてみるから後で掛け直すって。」

取り敢えず、なのは達は連絡を待つことになった。

清磨「それじゃあ……その間にこれまでの事情や俺達について話すよ。」

はやて「ほな、お願いな。」

その待ち時間を利用してなのは達は清磨から事情を伺うことにした。

清磨「まず……単刀直入に言うが、ガツシユは普通の子供じゃない。魔物だ。」

なのは「ま、魔物……!?!」

魔物という言葉に思わず驚愕の声を漏らすなのは。

清磨「そして人間界とは別に、もう1つ存在する世界がある。それが魔界だ。」

フエイト「魔界……」

自分の中にある魔界のイメージをフエイトは思い浮かべる。それは曇天が広がる空。そして、轟く雷鳴。正に暗黒の世界である。

清磨「一言に魔界と言っても、決して暗黒の世界とかじゃないぞ。環境や生活においても平和な世界だ。」

心の力とは未だに謎が多い未知の力。人間の感情一つで力の幅が大きくもなり小さくもなる。故に可能性も無限大である。

清磨「この人間界の至る所で魔物達は王を目指して戦い、互いの本を燃やし合う。本が燃えると魔界に送還されて魔王候補から脱落する仕組みだ。」

ガツシユの赤い魔本を清磨はテーブルの上に置いてなのは達に見せる。

清磨「だが、この本は誰にでも読める訳じゃない。選ばれた人間だけが本を読むことができるんだ。」

はやて「ほ、ほんまや……全然読まれへん。」

赤い魔本を手に取り、開いて確認したはやてが呟く。なのはとフェイトもはやてが持っている赤い魔本を覗き込む。

清磨「取り敢えず、俺達についてはこんなところだ。」

一先ず清磨は一度コーヒーを飲んで喉を潤す。

清磨「そんなある日、ガツシユが偶然拾った不思議な石に俺とガツシユの手が触れた瞬間、石は強い光を放ち、気が付いたらあの場所に……」

続いて清磨はこれまでの経緯を話す。

なのは「その石の特徴とか分かるかな？」

清麿「割と小さめの白い結晶のような石だったな。」

その時、フェイトの携帯電話の着信音が鳴る。

フェイト「あ、母さんだ。」

ディスプレイの表示を確認して電話に出るフェイト。

フェイト「もしもし、母さん？何か分かったの？ うん

うん えっ、どういう事？ そんな……何かの間違いじや……」

話を進めていく内にフェイトの表情は曇り始める。

フェイト「うん、分かった。ありがとう……母さん。」

表情が晴れないままフェイトは電話を切った。

清麿「どうかしたのか？」

全員の視線がフェイトに向けられる。

フェイト「うん……実はね、母さんが調べてくれたんだけど……モチノキ第二中学校なんて名前の学校はこの世界のどこにも存在しない。それどころか町の名前すら存在しないんだ……」

清麿「何ッ……!？」

ガツシユ「それはどういう事なのだ!？」

衝撃的な事実で清磨とガツシユは激しく動揺する。

フェイト「分からない。今、母さんが別ルートで詳しく調べてくれる。」

清磨「そうか……」

ガツシユ「ウヌウ……」

予想外の出来事が続いて不安が募る清磨とガツシユ。

なのは「清磨くんの話……作り話にしては良くできてるし、ガツシユくんの電撃も納得できるから嘘ではなさそうだけど……」

はやて「町や学校が存在せえへんのは変な話やなあ……」

不可解な出来事なのははやても頭を悩ませる。

清磨「すまない……高町達に迷惑かけて……」

なのは「気にしなくて良いよ。こついう事も私達のお仕事だから。」

清磨「仕事?」

フェイト「うん、私達は魔法が使える魔導師なんだ。私達の仕事は魔法関連の事件からこの世界を守ること。簡単に言うと警察みたいな仕事かな。」

「はやて「魔導師はこの世界では秘匿事項だから他言はせん」といな

「はやてが清磨達に念を押しした瞬間、二人の女子中学生が翠屋に来店する。」

アリサ「こんにちは」

すずか「お邪魔します。」

来店してきたのはアリサ・バニングスと月村すずか。なのは達の親友であり、魔法関連の良き理解者でもある二人だった。

なのは「あれ……？今日は稽古じゃなかったの？」

尤もな疑問をアリサとすずかに投げ掛けるのは。すると、アリサとすずかはなのは達のテーブル席までやって来た。

すずか「それが……いきなり講師の人が急病とかで稽古がお休みになったの。だから私達もお休みになっちゃったんだ。」

アリサ「稽古が無くなったのはラッキーだけど、無駄な時間を使っただわ。全く……迷惑な話よ。」

事情を説明したすずかの後にアリサが愚痴を零す。

アリサ「ところで、こいつ……見掛けない顔だけど誰なの？なのは達の知り合い？」

すずか「アリサちゃん……“こいつ”なんて言い方は良くないよ。」

清磨とガツシュに視線を向けて若干上から目線で訊ねるアリサを注意するすずか。

清磨「あ、俺は高嶺清磨。」

ガツシュ「ウヌ、私の名前はガツシュ・ベルなのだ。」

そんな二人に改めて清磨とガツシュは自己紹介をする。

アリサ「私の名前はアリサ・バニングス。で、隣にいるこの子は月村すずか。」

すずか「よろしくね。」

態度を改めたアリサと笑顔で清磨達に挨拶するすずか。

なのは「アリサちゃんとすずかちゃんのお家は凄いいお金持ちさんなんだよ。」

はやて「所謂、お嬢様やな。」

なのはとはやてが一言ずつ付け加える。

アリサ「でも、実際は色々大変なのよ。普段は塾や稽古で忙しいし、最近は変な悪戯も多いし……。」

清磨「“変な悪戯”？」

アリサ「私が直接何かをされたって訳じゃないんだけど、パパの会社が系列するお店で小さな爆弾事件が最近になって多発してるの。」

フェイト「物騒だね……」

悪戯の内容を聞いてフェイトが呟く。

アリサ「でも、爆発の規模自体はかなり小さくて怪我人も出てないんだけど……未だに犯人の目的は分からないのよねえ。」

溜め息混じりにアリサは言葉を続ける。なのは達はそんなアリサの身が心配で不安が募る。

アリサ「まあ、さすがに夜は私も不安だから護衛を付けてるけどね。」

心配かけまいとアリサはフォローを入れるが、それが却ってより一層なのは達の不安が募らせる。

アリサ「はあ……もうこの話はお終い。いつまでも暗い話じゃ時間が勿体無いでしょ。」

その空気に堪えかねたアリサが仕切り直した。

なのは「そう……だね。」

フェイト「折角、アリサとすずかも時間ができたんだから……暗い話は無しだよな。」

はやて「せやけど、何かあったら遠慮せんと言ってな。」

アリサの言葉で気持ちを切り替えたなのは達。

清磨「……………」

だが、なのは達が気持ちを切り替える中、清磨一人だけは浮かない表情だった。

- P M 5 : 3 9 -

その後、はやての提案で清磨達との親睦を深めようとアリサとすずかも談話に参加することになった。

アリサ「あっははは！清磨も苦労してるのねえ。」

すずか「ア、アリサちゃん……………そんなに笑うのは失礼だよ。」

その談話では様々な事を話し合った。学校の様子や自分達の友達など、話していく内に自然と皆の仲は打ち解けることができていた。

清磨「（確かに……………話しておいてあれだが、俺の日常って結構ハードだよな……………？）」

アリサに笑われて清磨は今更ながら気付いた。

清磨「そ、それよりも……………なんか悪いな月村。ガツシユの面倒をみてもらって。」

因みに席順は少しだけ変わり、清麿側の席にすずかとアリサが座る。だが、流石に四人が同じ席に座るのは多少窮屈なためガツシユをすずかの膝の上に座らせている。

すずか「ううん、大丈夫。ガツシユくん、すごく軽いから全然平気だよ。」

清麿の気遣いにすずかは笑顔で返す。

アリサ「ねえ、清麿って私達と同年なんでしょ?」

なのは「うん、そうだよ。」

清麿の代わりになのはが肯定して頷く。

すずか「そう言えば、私達って同い年の男子のお友達は居ないよね。」

清麿「そうなのか?」

すずかの言葉を意外そうな顔で清麿は訊ねる。

アリサ「まあね、残念だけど近付いてくる男子はみんな下心が見え見えの奴ばっか。もう嫌になっちゃっわよ。」

愚痴を零したアリサは最後に溜め息を吐く。

清麿「……………ははっ。」

すると、清磨は不意に小さく笑いを零した。

アリサ「ちよっと、なに笑ってるのよ？」

自分の愚痴を笑われたアリサが少し睨みを利かせる。

清磨「い、いや……なんて言うか俺のイメージしてるお嬢様とバニングスは随分と違う気がしてな。」

あらぬ誤解をされた清磨は慌ててアリサの誤解を解く。

ガツシユ「ウヌ、アリサ殿はまるでティオみたいなのだ。」

アリサ「ティオ？」

すずか「ねえ、ガツシユくん。そのティオって誰なの？」

清磨「ガツシユと同年の女の子で俺達にとって大切な仲間。少しお転婆で、気が強いところもあるけど心優しい元気な子だよ。」

ガツシユが答えるよりも早くに清磨がティオの人柄を分かり易く説明する。

すずか「ふふっ、確かにアリサちゃんに似てるね。特に昔のアリサちゃんにそっくりだよ。」

アリサ「ちよっと！それって私が子供だっけ言いたいなの！？」

はやて「ま、まあまあ……」

なのは「アリサちゃん……お、落ち着いて。」

一人騒ぐアリサをなのはとはやてが宥める。

清磨「お、俺……なんか悪いこと言ったか？」

この騒ぎの中、清磨は若干戸惑い気味だった。

フェイト「ねえ、清磨……」

清磨「ん？」

その時、小さな声で呼び掛けるフェイトに清磨は反応する。

フェイト「アリサ達は私達の事情も理解してくれてるし……魔界や魔物の事情も話して平気だよ？」

実は言つと清磨はなのは達に魔界や魔物の事情を密かに口止めしていた。

清磨「確かに……バニングスと月村が信頼における人間だつてことは俺でも分かる。」

フェイト「だつたら……」

清磨「だが、今……起きてる不可思議な事態の当事者である俺達が何一つ現状を把握できていない。それなら下手に話さない方が良い。話すのは事態を把握してからでも遅くはないと思つし……」

二人は周りに聞こえない程度の声で話を続ける。

清磨「それに……魔物の事情を知って、バニングス達を危険な戦いに巻き込んでしまう可能性も無い訳じゃない。」

そして、清磨は自分の隣の席でガツシュを可愛がるアリサとずずかを見る。

清磨「バニングスと月村は、お前達みたいに自身を守る術が無い。万が一、戦いに巻き込まれでもしたら危険だ。」

フェイト「あ……………」

この時、フェイトは清磨の人の良さに思わず呆気に取られてしまった。

清磨「勿論、本来ならお前達にもあまり関わってほしくは無いんだが……………」

やがて、フェイトの呆気顔は自然と笑みに変わる。

フェイト「清磨は優しいね。」

清磨「えっ……………?」

突然の言葉に清磨は一瞬だけ思考が止まった。

フェイト「だって…………自分達の事より他人の事を真っ先に考えてる。それって清磨が優しいからだと私は思うよ。」

清磨「そ、そうかな…？／＼／」

フェイト「そうだよ。」

照れる清磨にフェイトは笑顔で頷く。

ガツシユ「ウヌ、二人で何を話しておるのだ？」

すずかの膝の上に座っているガツシユが清磨に訊ねる。

清磨「な、何でもねえよ！／＼／」

ガツシユ「ウヌ……？」

照れを隠す清磨にガツシユは首を傾げ、その様子を眺めていたフェイトは小さく笑っていた。

すると、アリサは自分の腕時計で時刻を確認する。

アリサ「すずか、そろそろ帰らないと塾に遅れるわよ。」

すずか「うん、そうだね。」

時間に猶予が無いことをすずかに告げたアリサは鞆を持って席を立つ。すずかもガツシユを膝から降ろしてアリサと同様に鞆を持って席を立つ。

アリサ「それじゃあ私達は先に帰るわね。」

「さすが「またね。」

清麿「ああ、ガツシユの面倒を見てくれてありがとう。」

ガツシユ「ウヌ、今日は楽しかったのだ！また遊ぼうぞ！」

清麿とガツシユが一言ずつ言葉を掛けて、なのは達も手を振ってアリサとさすがを見送った。

なのは「ところで……清麿くん達はこれからどうするの？」

アリサとさすがが店を出た頃合いを見計らってなのはが清麿に訊ねた。

清麿「何がだ？」

質問の意図が理解できなかった清麿はなのはに問い返す。

はやて「今の清麿くん達には帰る家とか行く当とかも無いんとちゃうの？」

清麿「あ……………」

完全に帰る場所や手段が無いことを失念していた清麿は言葉に詰まる。

フェイト「あの……清麿達さえ良ければ私の家に来る？」

そんな清麿にフェイトが助け舟を出した。

清曆「えっ？」

フェイト「あ、いや……今、家には母さんとアルフしか居ないから部屋が余ってるし、母さんが居れば情報も入ってくるから都合が良
いと思うんだ。」

控えめに言葉を続けるフェイトは清曆に利点を説明する。

清曆「……………」

フェイト「……………やっぱり迷惑だったかな？」

しかし、反応を示さない清曆にフェイトは不安げに訊ねる。

清曆「あ！い、いやいや……そう言う訳じゃないんだ。ただ……………」

本音を告げるかどうかに迷いがあった清曆は一瞬だけ言葉に詰まる。
そして、清曆は意を決して告げることにした。

清曆「俺達みたいな得体の知れない奴らと関わるなんて……………危険
だとは思わないのか？」

フェイト「思わないよ。」

清曆の問いにフェイトは即答した。

フェイト「私は清曆が悪い人間だとは思えない。私は……………清曆の事
を信じていることができる。」

自信を持ってフェイトは言い切った。

フェイト「だから、清曆達は遠慮や心配なんかしないで私達を頼っても良いんだよ。」

はやて「ほんまに、清曆くんはうちに言い遣い過ぎやで。」

なのは「うん、2人の言うとおりだよ。清曆くんも……もっと私達の事を信じてくれても良いんじゃないのかな？」

フェイトの言葉に続いて呆れるはやてと二人の言葉に同意するなのは。

清曆「……………」

ガツシュ「清曆。」

その時、今まで口を挟まなかったガツシュが遂に口を開く。

ガツシュ「私は今まで多くの人間や魔物と出会ってきた。中には悪い者も居たが、それ以上に私には友達や仲間ができた。」

清曆「そうだな……………」

ガツシュ「その友達の力を借りることは悪いことではない。何より私はフェイト殿達の気持ちを無駄にはしたくないのだ。」

いつになく真剣な面持ちでガツシュは自分の意見を述べた。

なのは「そうだね、私達はもう友達だよね。」

はやて「せやから、友達が困つとる時は助けるのが当たり前やで。」

ガツシユの言葉に続いてなのは達も清磨達との関係を意思表示する。

清磨「（友達………か。）」

ガツシユと出会う前までの自分には友達など必要の無いものと罵っていた清磨だが、今となっては掛け替えのない存在だと清磨自身も自負している。

清磨「（こんな気持ちに気付いたのも全部……ガツシユのお陰か……）」

自分の隣に座るまだ幼い子供のお陰で清磨は大きく変わった。

清磨「（俺は……色々と考え過ぎてたみたいだな。）」

そして、清磨は考えを改めることにした。

清磨「分かった。もう変に考え過ぎるのはやめるよ。」

フェイト「うん、きつとそれが良いよ。」

はやて「ほな、話も纏まったことやし……そろそろ帰るか？」

今日の一件は保留として皆はそれぞれの帰路についた。

（ハラオウン家）

自宅マンションに案内するフェイトと暫くの間だけ居候となる清磨とガツシュは自宅玄関前まで来ていた。

フェイト「ただいま」

清磨「お、お邪魔します。」

ガツシュ「ウヌ、お邪魔するのだ。」

そして、フェイトを先頭に清磨とガツシュもハラオウン家に足を踏み入れる。

リンディ「お帰りなさい、フェイト。」

すると、エプロン姿のリンディが三人を出迎えた。

リンディ「清磨くん、話は既に聞いてるわ。気兼ねしないで良いからね。」

清磨「あ、ありがとうございます。」

余所余所しく、少し落ち着きもない様子の清磨。

フェイト「それじゃあ清磨達の部屋の準備をしてくるね。」

そう言ってフェイトは直ぐに部屋の準備に取り掛かった。

リンディ「清磨くん達はリビングで寛いでてね。今、お茶淹れるから。」

清磨「あ、お構いなく……」

お茶の準備のため台所へ向かったリンディに一声かけた清磨はガツシユを連れてリビングに向かう。

アルフ「おっ！アンタ達が例の次元漂流者かい。」

リビングに入ると一匹の朱い子犬。アルフが清磨達に話し掛けてきた。

清磨「ん？“次元漂流者”って何だ？」

本来なら動物が言語を話すことに驚くのが普通だが、清磨達は魔物と関わる内にある程度の非常識な出来事には慣れてるため驚かない。

リンディ「次元漂流者は次元間における事故などが原因で他の次元へと漂流してしまった人間の事よ。」

その時、紅茶の用意を調べてきたリンディがアルフに代わって清磨の疑問に答えた。

清磨「あの……他の次元ということは……」

リンディ「別世界。いや、清磨くんの話から考えると平行世界と言った方が正しいわね。」

一方、難しい会話を始めた清磨とリンディを余所にガツシユは少し離れた場所でアルフと遊び始める。

清磨「平行世界……確か前に本で読んだことがあります。ある世界から分岐し、それに並行して存在する別の世界。俗に言うパラレルワールドやIFの世界のことですよね。」

リンディ「そうね、別世界とは意味合いが違うからあなた達は特例中の特例ね。」

用意したカップにリンディは紅茶を注ぐ。

リンディ「ただ……平行世界からの次元漂流者は、前例が無いに等しいの。だから帰る手段も……」

だが、紅茶を淹れる手を止めてしまおうリンディ。

清磨「無い………もしくは難しいという訳ですか。」

リンディ「ごめんなさい。」

清磨「気にしないで下さい。帰る手段は必ず見付けます。」

リンディ「あら………意外に冷静なのね。普通は落ち込んだり、混乱するものよ。」

清磨「まあ、こう言った面倒事には慣れてますから………」

魔界や人間界と魔界の狭間の世界を訪れた経験。さらには危うく未
来の魔界へ連れて行かれそうになった経験がある清磨だからこそ冷
静でいられるのだ。

清磨「でも……凄いですね。この短時間でここまで調べたなんて。」

この約二時間でリンディは清磨の証言を基に町や学校の存在の有無を確認して清磨達が平行世界からの次元漂流者だと割り出した。故に清磨はその高い情報操作能力と仕事能力に感心していた。

リンディ「私の情報網を使えばこんなの楽勝よ。」

清磨「あはは、それは頼もしいですね。」

すると、清磨達の部屋の準備を終えたフェイトが戻ってきた。

フェイト「清磨、部屋の準備ができたよ。」

清磨「ああ、ありがとう。本当に助かるよ。」

フェイト「気にしないで。それより部屋の説明をするから一緒に来てくれないかな？」

清磨「分かった。」

すぐにフェイトは部屋の使い勝手を説明するために清磨をその部屋に連れて行った。

リンディ「ふふ、この家も賑やかになりそうね。」

そして、清磨とガツシュの新たな日常が始まるのだった。

To Be Continued .

第1話（後書き）

感想、誤字・脱字、意見、評価などがあれば宜しくお願いします。

第2話

（ハラオウン家）

翌朝 AM 7 : 4 0

フェイト「はい、この街の地図と鞆だよ。」

清麿「ありがと。」

朝、フェイトからこの街の地図と手軽に使える鞆を受け取る清麿。

フェイト「それ……私がここで暮らすようになった頃の地図なんだ。小学校3年生の頃だから5、6年くらい前だね。」

地図を渡したフェイトは少し説明を補足する。

フェイト「古い地図だから街の様子が変わってるかもしれないけど、図書館か役場に行けば新しい地図が貰えると思うよ。」

清麿「ああ、分かった。」

今日、清麿はこの街の地理を把握するためにガッシュを連れて散策に出掛ける予定なのだ。

フェイト「本当は私達が案内できたら良かったんだけど……」

だが、生憎とフェイト達は学校があるので同行できない。

フェイト「母さんも用事があるみたいだし……」

清麿「地図と方角さえ分かれば大丈夫だ。それより早く行かないと遅刻するぞ。」

フェイト「うん……それじゃあ行って来ます。」

ガツシュ「ウヌツ、行ってらっしゃいなのだ!」

清麿達に見送られてフェイトは一足先に家を出た。

清麿「よし、俺達も支度したら行くぞ。」

ガツシュ「ウヌツ!」

そして、清麿とガツシュは支度を始めた。

〈図書館〉

PM1:00

午前中は商店街や一通りの地理を把握した清麿とガツシュは図書館へやって来ていた。

清麿「頼むから……」
「ここではおとなしくしてろよ。」

ガツシュ「ウヌウ……」

実は午前中に訪れた商店街の魚屋でガツシユが大好物のブリを見付け、一騒動があったという余談があるのだ。故に清麿はガツシユに念を押す。

清麿「それにしても……………広い図書館だなあ。」

ガツシユ「ウヌ、本がいっぱいあるのだ。」

そして、清麿とガツシユは広い館内の散策を始める。

ガツシユ「清麿、やはりここには本を読みに来たのか？」

清麿「ん？まあ、確かにそれもあるけど……………」

ガツシユ「……………」

清麿「ちよつと気になる事があるんだよ。」

ガツシユ「ウヌ……………？」

清麿が図書館を訪れた目的は別にあつた。

〈図書館から帰りの道中〉

P M 3 : 4 6

ガツシユ「結局……………清麿は何を調べていたのだ？」

清磨「色々だよ。色々。」

ガツシュ「むう……教えてくれても良いではないかあ。」

またも清磨はガツシュを適当にはぐらかす。

ガツシュ「清磨！あそこにフェイト殿達が居るのだ！」

その時、ガツシュは自分達の遙か前方を歩く制服姿の五人組を見付けて指差す。

ガツシュ「お　　いッ！フェイ……」

刹那、ガツシュがフェイト達を呼び止めようとした瞬間、街の至る所から爆発音が聞こえ始める。それも一回や二回ではなく連鎖的に何回も爆発音が続く。

清磨「これは……バニングスが言ってた爆弾事件か!？」

周囲を警戒しながら清磨は辺りを見回す。

ガツシュ「清磨ッ!!!」

次々と起こる爆発騒ぎの中、一台の車がフェイト達の横に急停車し、黒衣に身を包んだ数人の人間がフェイト達を取り囲む。

清磨「(なッ……!？あ、あれはヤバい!)」

危険を察知した清磨は鞆から魔本を取り出す。

清磨「（いや……駄目だ。呪文は使えない。」

清磨が考えを改めている間に謎の一味はフェイト達に抵抗の間を与えずにスタンガンで気絶させて車に連れ込んだ。

ガツシュ「清磨！早くフェイト殿達を助けに行くのだ！」

清磨「待て！今は動くな！」

ガツシュ「何ッ！？それでは私達はここで黙って見ていると言つのか！？」

清磨「そうじゃない！いま迂闊に動けば、あいつ等が危険だって言つてんだよ！」

清磨とガツシュが議論している間に車は猛スピードで走り去ってしまった。

清磨「くそッ……！抜け目の無い奴らだ。追跡されないようにGPS機能が付いた携帯も捨ててやる。」

現場に駆け付けた清磨がフェイト達の携帯電話を拾い上げて呟く。

ガツシュ「清磨！早くラウザルクを！」

清磨「駄目だ！いくら街の人間の注意が逸れていても、術を使えば嫌でも目立つ！」

ガツシュ「ウヌウ……………」

悔しさを堪えるガツシユは俯いて拳を震わす。

清曆「(く……ッ！先手を打たれた！こうなる前に注意するつもりだったのに……！)」

言葉では平静を装う清曆だが、内心はかなり焦っていた。

ガツシユ「そうだ清曆！私の鼻を使ってあの者達を追うのだ！それなら……」

清曆「それも駄目だ。奴らは車を使ってるんだぞ。辺りは火薬の匂いが充満してるし、おまけにこの街は風に乗って潮の匂いが……」

そこで清曆は何か気付いて言葉を止める。

清曆「(まさか……！)」

そして、清曆は走り出した。

ガツシユ「清曆ッ!?!」

当然、ガツシユも急いで清曆の後を追う。

ガツシユ「清曆！一体どこに向かっておるのだ!?!」

清曆「良いから黙って付いて来い！」

突然の清曆の行動に戸惑いながらもガツシユは清曆の後ろを走る。

ガツシユ「ッ!」

すると、ガツシユの目の前にとある建物が現れた。

ガツシユ「こ、ここは……」

足を止めたガツシユの目の前には先程まで自分達がいた図書館があった。

〈図書館〉

再び図書館を訪れた清磨は無料配布されている最新の街の地図を手に入れる。

ガツシユ「清磨ッ! いい加減に私にも分かるように説明してほしいのだ!」

遂に痺れを切らしたガツシユが館内にも関わらず声を張り上げる。

清磨「ガツシユ。今から言うことを良く聞くんだ。」

ガツシユ「ウヌ。」

そんなガツシユに清磨は人目を気にしつつ冷静に対処する。

清磨「奴らの目的は十中八九、バニングスを狙った誘拐だ。しかも、あの手際の良さは並みの素人じゃない。奴ら……この手の仕事のプロに間違いない。」

話しながらも清磨は最新の地図と今日の朝にフェイトから貰った地図を机に広げた。

清磨「街の爆発騒ぎも奴らの仕業だろうな。連鎖的に爆発を起こして街の人間の注意を引き付ける。言わば一連の爆弾事件はこのための伏線。陽動だ。」

自分の推測を話しながら清磨は二つの地図を見比べる。

清磨「夜になればバニングスには護衛が付く。だから奴らは敢えて危険を冒し、陽動を使って昼間の犯行に及んだんだ。」

清磨の推測は全て辻褄が合っている。だから確信を持つことができるのだ。

清磨「そして、奴らの狙いがバニングスの誘拐なら……そう遠くには行かない筈。少なくとも、この街からは出ない。」

ガツシュ「しかし、今から街中を探しても時間が無いのだ。それに早くフェイト殿達を助けに行かねば……」

徐々に焦る気持ちが高ぶるガツシュ。

清磨「大丈夫だ。奴らの居場所はもう見当が付いてる。」

ガツシュ「何ッ!?それは本当か!?!」

清磨「ああ、この街はかなり海に近い。奴らの逃走経路は恐らく海から船に乗って逃げる算段だろうな。」

両方の地図を交互に見比べて必死に“ある場所”を探す清麿。

清麿「奴らは必ずこの街にある人気の無い場所に身を潜めてる筈なら、自ずと場所は限られてくる。」

ガツシユ「ウヌウ……勿体振らずに早く教えて欲しいのだ！」

まだ幼い子供のガツシユには清麿の理論的な解説が理解できなかった。

清麿「つまり、6年前の地図には載ってるが、現在の地図には載ってない場所。そして、尚且つ海に近くて人気の無い場所……」

確信を得た清麿は6年前の地図の一点を指差す。

清麿「この街の港近くにある……元・第三貨物倉庫。」

〈元・第三貨物倉庫〉

犯人A「おい……金の入金を確認次第、こいつ等を殺して海外に逃走する。準備しとけ。」

犯人B「別に焦んなくても平気だろ。どうせ警察は街の爆弾騒ぎに気を取られて大忙しだろうからな。」

犯人A「それでも用心に越したことはない。一瞬の油断は命取りだぞ。」

犯人B「へいへい……」

清麿の推理通り。なのは達は廃墟となった貨物倉庫で監禁されていた。

アリサ「状況は……最悪ね。」

なのは達は手足を縄で拘束されており、密かに脱出の手立てを相談していた。

すずか「なのはちゃん達の魔法で何とかできない？」

一抹の期待を込めてすずかは訊ねる。

はやて「魔法さえ使えれば何とかできるんやけど……」

なのは「私達のデバイスは鞆の中だし……」

フェイト「いくら私達でも……何もできない。」

しかし、敢え無くその期待は打ち砕かれ、なのは達は絶体絶命となった。

犯人B「なあ、こいつ等さ……このまま殺すのは少し勿体無くないか？」

すると、なのは達を指差して犯人Bは仲間にも同意を求める。

犯人C「あ、俺もそう思ってたんだよなあ。」

犯人D「だよな！こんなチャンスなんか滅多にねえんだし、遊んで

も良いよな？」

そんな犯人Bの言葉に数人は賛同した。

犯人A「……………好きにしる。」

対して、犯人Aは興味なさげに携帯電話を片手に倉庫から出て行った。

犯人B「んじゃ、遠慮なく遊ばせてもらいますか。」

真っ先に犯人Bがなのはに手を伸ばす。

なのは「い、嫌……………やめて……………来ないで……………」

今までにない恐怖がなのはに迫る。

アリサ「ちよつと！あんた達の狙いは私でしょ！この子達は関係ないじゃない！」

犯人C「まあまあ、お前もちゃんと順番に遊んでやるから黙って見てろ。」

まるで聞く耳を持たない犯人達は徐々になのはへ迫る。

フェイト「（お、お願い……………誰でも良い。誰でも良いから……………なのはを助けてッ！）」

その時、轟音と共に倉庫の壁が大破した。

犯人D「な、何だッ!？」

この場にいる全員の視線が一カ所に集まる。すると、爆煙が立ち込める中、二つの人影が煙に浮かび上がる。

清麿「待たせて悪かったな。」

ガツシュ「もう大丈夫だぞ。」

煙の中から現れた希望の光。それは高嶺清麿とガツシュ・ベルであった。

犯人C「はんッ!何事かと思えばただのガキ2匹じゃねえか。」

犯人B「構わねえ!殺せッ!」

相手が二人の子供と分かると犯人達は威勢良く言葉を発する。

清麿「セツト!!!」

清麿は左手で魔本を開き、右手で標的を指差す。

清麿「ザケルッ!」

そして、ガツシュの口から放たれた電撃は犯人達となのは達の間を的確に隔てた。

犯人C「な……電撃だと!？」

犯人D「ば、化け物だ……！」

犯人達が動揺している間に清磨とガツシユは、なのは達を庇うように犯人達の前に立ちはだかる。

犯人B「おいッ！たかがガキ2匹だ！怯むんじゃねえ！」

そう言つて犯人Bは懐から拳銃を取り出し、他の犯人達も辺りに落ちていた鉄パイプを拾う。

清磨「第三の術！ジケルド！」

それを見た清磨は先手を取り、呪文を唱えてガツシユの口から犯人Dに向かつて速度の遅い光球が放たれる。

犯人D「な、何だ……？俺の体が光って……」

ジケルドの効果で犯人Dの体を強力な磁石に変え、拳銃や鉄パイプだけでなく、倉庫内の金属製の物まで吸い寄せた。

犯人D「うわあああああ！」

当然、目の前の出来事を理解できる筈がない犯人Dは恐怖に襲われ、完全に身動きが取れなくなって意識を手離した。

犯人C「お、おい！大至急、全員ここに来い！」

武器となる物は全て封じられたが、犯人Cが咄嗟に無線で増援を呼ぶ。

犯人C「ば、化け物が……」

その直後、無線機もジケルドの磁力に引かれて犯人Cの手から離れる。だが、その連絡を受けて数十人の仲間が続々と現れた。

清磨「まだこんなに仲間が居やがったか……」

それを見た清磨は魔本を構えて体勢を立て直す。

ガツシュ「清磨ッ！ここは私に任せるのだ！」

ところが、この人数を相手にするはずのガツシュは臆する様子がない。それどころか逆に力が漲みなぎっていた。

清磨「本当に……任せて大丈夫だな？」

ガツシュ「心配はいらぬ。この程度の者達など私1人の力で良い。時間を稼ぐくらいは簡単なのだ。」

清磨「……………」

一瞬だけ。ほんの一瞬だけだが清磨の目に映るガツシュの背中は大きかった。

清磨「分かった。すぐに加勢する。3分だけ時間を稼げ。」

ガツシュ「ウヌ、任せるのだ。この者達は誰一人ここを通させはせぬ。清磨は早くフェイト殿達を助けるのだ。」

幾多の闘いを経験し乗り越えたが故の逞しい姿のガツシュ。

清麿「よし！それなら思う存分暴れてこい！ガツシュ！」

ガツシュ「ウヌツ！」

そんなガツシュの言葉を清麿は何の迷いや躊躇もなく信じ、この場を託してなのは達の救出に向かう。

犯人B「そうはさせるかッ！」

しかし、背を向ける清麿の後ろから犯人Bが殴りかかる。

ガツシュ「ここは通さぬと…！」

すかさず犯人Bの懐に入り込んだガツシュは得意の頭突きを腹部に叩き込んだ。

犯人B「が…は……！」

ガツシュ「言ったたであらう！」

強烈な一撃を喰らった犯人Bは悶える間もなく気絶した。

清麿「全員、怪我は無いか？」

なのは達の拘束縄を解きながら清麿は皆の無事を確認する。

フェイト「う、うん……大丈夫だよ。」

まず最初に清磨はフェイトの縄を解く。

はやて「そ、そんな事より！！ガツシユくん1人である人数と戦うんは無茶やで！」

なのは「そうだよッ！早くガツシユくんを助けに行かないと……！」

解放されたフェイトがはやての縄を解き、清磨がなのはの縄を解く。

清磨「いや……ここは俺とガツシユに任せてほしい。」

アリサ「はあッ！？バカ言ってんじゃないわよ！」

アリサとすずかの縄も解かれ、無事に全員が解放されたが、清磨の言葉にアリサが過剰に反応する。

アリサ「この際、あんた達が何者なのかは聞かない！だけど、これ以上は無関係なあんた達を危険には巻き込めない！」

今回の事件に一番責任を強く感じているのは他でもないアリサであった。

アリサ「だから！無茶な真似だけはやめて！」

故に責任感が人一倍強いアリサは必死に清磨を制する。

清磨「やっぱり……ティオに似てるよ。バニングスは。」

だが、清磨はそんなアリサに対して的外れな言葉をかけた。

アリサ「な、何よ！今はそんな事は言ってる場合じゃ……」

フェイト「アリサ、今の清曆に何を言っても無駄だよ。」

すると、フェイトがアリサの言葉を遮り、肩に手を置いて逆にアリサを制する。

フェイト「私達が何を言っても清曆は絶対に考えを変えない。だったら、清曆に任せてみても良いんじゃないかな？」

アリサ「うう……わ、分かったわよ。」

フェイトの説得によりアリサも渋々納得した。

アリサ「その代わり！怪我なんかしたら絶対許さないわよ！」

清曆「……………任せろ。」

アリサから激励の言葉を受けた清曆は力強く頷いた。

清曆「それより……みんなには頼みたいことがある。」

すずか「“頼みたいこと”？」

清曆「ああ、かなり危険な頼みになるが……奴らの思惑を完全に潰すには、みんなの協力が必要なんだ。」

とある提案を持ち掛ける清曆になのは達は全員で顔を見合わせて首を傾げた。

ガツシユ「ぐ……ぬうう……」

一方、魔物であるガツシユでも呪文抜きで数十人の人間を相手にしていれば、悪戦苦闘となるのは必然である。

犯人E「調子に乗ってんじゃねえぞッ！！くそガキがあ！」

徐々に追い詰められるガツシユに犯人Eの拳が迫る。

清磨「ザケルッ！」

犯人E「ぐわあああああ！」

だが、その拳がガツシユに届くことはなく、寸前の距離で清磨が呪文を唱えてサポートした。

ガツシユ「清磨ッ！」

清磨「気を抜くな、ガツシユ。こっからが勝負だぞ。」

ガツシユ「ウヌッ！」

清磨の加勢にガツシユは意欲を取り戻し、先程のような苦痛の表情は一切無くなった。

清磨「ザケル！」

犯人グループ達に反撃の機会を与えず、清磨は呪文を唱える。

清磨「ザケル！」

時には不意を突かれることもあるが、持ち前の反射神経と瞬発力を活かして避ける。そして、また一撃。清磨が呪文を唱え、ガツシュが電撃を放つ。

清磨「ザケル！」

呪文さえ使えれば戦況は清磨達の独壇場。次第に犯人グループ達も残り十名となる。

アリサ「清磨　　ッ！」

清磨「ッ！！！」

戦闘が佳境に迫った時、突然の呼び掛けの声に清磨が反応して視線を向けると、アリサが高々と右拳を掲げていた。

清磨「よしッ！あとは残りの奴らを片付けるだけだ！」

ガツシュ「ウヌッ！」

それを確認した清磨はさらに闘志を燃やし、ガツシュもそれに応える。

清磨「ザケル　　ッ！！！」

最早、犯人グループ達に勢い付く清磨とガツシュを止める術はなか

った。

- 数分後 -

ガツシユ「ウヌ、正義は必ず勝つのだ！」

犯人グループ達は清磨達の手により完全に無力化された。

なのは「みんなも無事で良かったよ。」

フェイト「そうだね。みんなが無事に助かったのは清磨達のお陰だね。」

はやて「はあ……………ほんまにもうアカンかと思ったわ。」

すずか「でも、これで一安心だね。」

アリサ「そうね、何はともあれ一件落着だわ。」

ガツシユを始めになのは達も喜びの声を上げる。

清磨「（おかしい……………あれだけ計画性も高く、無駄の動きが一切ない奴らだった筈なのに…………）」

だが、あまりの呆気の無さに清磨だけは違和感を感じていた。

清磨「（弱過ぎる……………というより動きがバラバラで纏まりが無さ過ぎるんだ。…………）」

次第に清磨は違和感の正体に迫る。

清磨「（……………そうかつ！）」

違和感の正体を突き止めた清磨は辺りを見回す。すると、物陰からアリサを狙っている銃口を発見した。

清磨「全員、物陰に隠れる！」

いち早く危険を察知した清磨はアリサを突き飛ばす。刹那、一発の弾丸が清磨の腕を掠めた。

清磨「ぐっ……………」

一瞬の僅かな痛みが清磨の表情を歪める。

清磨「早く隠れるんだッ！固まっては格好的になる！」

そんな清磨の指示でなのは達は速やかに物陰へ身を隠す。

すずか「ア、アリサちゃん！！早くこっちに！」

アリサ「で、でも……………」

物陰からすずかはアリサに手を差し伸べる。だが、アリサは腰が抜けて動けずにいた。

清磨「ガッシュ！」

ガツシユ「ウヌッ！」

交わす言葉は殆ど無いが、ガツシユは清磨の呼び掛けの意味を理解した。

清磨「ラウザルク!!!」

肉体強化の呪文を清磨が唱え、ガツシユに雷が降り注がれる。

ガツシユ「しつかり掴まっておるのだぞッ！」

肉体が強化されたガツシユが清磨とアリサを担ぐ。だが、再びアリサを狙って銃口から二発の弾丸が発砲される。

清磨「急げ！ガツ シユ！」

ガツシユ「ぬおおおおおおおおおおおおおッ！」

そして、タッチの差で清磨達は二発の弾丸から無事に難を逃れて物陰へ隠れることができた。

清磨「（ふう……他のみんなも上手く隠れたみたいだな。）」

咄嗟の出来事に驚き、戸惑いながらも清磨は物陰から全員（清磨以外）が無事に物陰へ隠れたことを確認する。

犯人A「驚いたよ。俺の完璧な計画がここまで潰されたのは初めてだ。」

そこに拳銃を片手に持った犯人Aが悠々と現れる。

ガツシユ「清磨、大丈夫か？」

清磨「あ、ああ……少し掠めただけだ。心配するな。」

怪我を心配するガツシユに清磨は傷口を押さえながら言う。

清磨「……油断した。どうしてもっと早くに気付かなかつたんだ。」

しかし、清磨は内心で自分の考えの甘さを悔いていた。

清磨「（計画性の高い犯行は知将である奴の差し金。奴を中心とすることで連中の動きは180°違ってくる。）」

一度、清磨は気持ちを落ち着かせて考えを整理する。

犯人A「やっぱり……金で雇った程度の奴らじゃ使えねえな。」

すると、サイレンサーが取り付けられた拳銃を見せびらかすように振る舞う犯人A。

清磨「（サイレンサー。銃声が聞こえない程に小さ過ぎるのはあれが原因か……）」

物陰から様子を窺う清磨。

清磨「（しかも、あの野郎……ジケルドの効果を見抜いて今まで

隠れてやがったな……」

倒した連中に比べると犯人Aはかなりの切れ者であった。

犯人A「まあ、計画は滅茶苦茶にされたが問題ない。金はもう既に入金された。あとは……」

今、互いの頭脳による戦いが行われている。

清磨「（勝負を仕掛けるなら今しか無い……！）」

犯人A「お前らの始末だけだ。」

その時、物陰から清磨を担いだ肉体強化中のガツシユが飛び出す。

犯人A「そこかッ！」

反射的に犯人Aは一発だけ発砲した。しかし、肉体強化されたガツシユの速さを活かして清磨は物陰から物陰へ移動する。

犯人A「外したか……」

再び犯人Aが撃った二発の弾丸は清磨達を狙うが、清磨達はさらに物陰へ移動して犯人Aを攪乱させる。

犯人A「このッ……！！」

さらに犯人Aは清磨達を狙って二発の弾丸を撃つ。だが、惜しくも狙いは外れた。

犯人A「チツ、ちよろちよろ逃げ回りやがって…」

そして、苛立つ犯人Aの前に清磨とガツシユは姿を現した。ラウザルクの効果も消え、清磨達は犯人Aと対峙する。

犯人A「どうした？鬼ごっこは終わりか？」

清磨「その銃……ワルサーPPK/Sがマガジンに込められる弾の数は8発。」

すると、犯人Aを無視して清磨は拳銃を見据えて話し始めた。

清磨「まず最初にバニングスを狙って3発。次に囮となって逃げ回る俺達に5発。計8発。」

犯人A「……………」

清磨「つまり、その銃にはもう弾は残ってない。」

犯人A「やられたな……………」

清磨の策に嵌った犯人Aは呟く。そんな犯行Aを拘束しようと清磨は歩み寄る。

犯人A「おっと、動くなよ。」

しかし、犯人Aから余裕の表情は消えることなく、清磨は歩みを止めた。

犯人A「この倉庫には爆弾を仕掛けてある。この起爆スイッチを押せば、どうなるかは分かるよな？」

そう言つて拳銃を懐へ仕舞い、代わりに起爆装置を取り出す。

清磨「悪いが……爆発ならしないで。」

犯人A「何だと……？」

清磨の言葉に犯人Aは低い声で聞き返した。

清磨「簡単なことだ。街の爆弾騒ぎがテメエらの仕業なのは分かった。だから、テメエらの最後の切り札が爆弾だということも想定できる。」

対して清磨は怯える様子はなく得意気に自分の推測を述べる。

清磨「爆弾で倉庫を跡形も無く消し飛ばせば証拠も一切残らないしな。」

犯人A「……………仮にだ。お前に爆弾を解除できる程の技量があるとして、そんな時間は無かった筈だぞ。」

犯人Aの指摘は正しい。清磨は拘束されたなのは達を解放するとガツシユと共に残党を鎮圧していたので爆弾を探して解除することは不可能である。

清磨「確かに俺には時間が無かった。“俺には”……………な。」

（回想）

遡ること10分程前

清磨「それより……みんなには頼みたいことがある。」

すずか「“頼みたいこと”？」

清磨「ああ、かなり危険な頼みになるが……奴らの思惑を完全に潰すには、みんなの協力が必要なんだ。」

危険な頼みと承知の上で協力を求める清磨はなのは達を直視できずに視線を落とす。

フェイト「清磨。」

名前を呼ばれて清磨が視線を戻せば、全員が覚悟を決めた表情をしていた。

清磨「（馬鹿だな……俺は。）」

それを見た清磨は自分も覚悟を決める。

清磨「みんなには……この倉庫内のどこかにある爆弾を探してほしいんだ。」

なのは「ば、爆弾!？」

かなり物騒な代物の存在に思わずなのはが声を上げる。

清麿「そうだ。俺の考えが正しければ、この倉庫内には間違いなく爆弾が仕掛けられてる。」

確信を持つ清麿は断言した。

清麿「そして、その爆弾を解除してほしい。」

はやて「む、無理ヤツ！いくらウチらでもそんな経験なんかしたくと無いんやでツ！」

無茶を通り越して無謀な行動を提案する清麿にはやてが猛反論する。

清麿「大丈夫だ。俺を信じることができれば……………必ず成功する。みんなは俺を信じられるか？」

なのは達全員に最後の覚悟を清麿は問う。

アリス「はあ……………何当たり前なこと聞いてんのよ。」

清麿「……………」

静かに次の言葉を待つ清麿。

すずか「信じるよ。清麿くんの事を。」

全員の想いは同じで当然の如く覚悟も決まっていた。

清麿「決まりだな。」

く回想終了く

犯人A「なるほど、あの小娘達がお前の指示で動いていたか。抜かりの無い奴め。」

清磨「それはお互い様だろ？」

犯人Aを完全に追い詰めて清磨は勝利を確信していた。

犯人A「んじゃ、もうこれは使えねえか。」

起爆装置を何回か押して犯人Aは作動不可を確かめる。

清磨「テメエの負けだ。観念しやがれ。」

犯人A「そいつはどうか？」

だが、犯人Aは焦る素振りを見せない。

清磨「どういう意味だ……？」

犯人A「小僧、良いこと教えてやるよ。あらかじめ銃に弾を装填した状態で8発入りマガジンをセットすれば……」

再び犯人Aはゆっくりと懐に手を忍ばず。

犯人A「9発になるんだよ。」

そして、犯人Aは先程の拳銃を取り出した。

清麿「(何ッ……!?)」

予想外の事態に清麿は動揺を隠せずにいた。

犯人A「お前が消えれば、このガキも電撃は出せねえよな。」

清麿「(この野郎……そこまで気付いていたか。)」

一気に立場が逆転され、清麿は思考を最大限まで回転させる。そして、ガツシユは僅かな隙を狙おうと悟られないように身構える。

犯人A「ガキも妙な真似はするなよ。少しでも動けば小僧の命は無い。」

しかし、それに気付いた犯人Aは銃口を清麿の頭に構えて脅しをかける。

ガツシユ「ぐ……ぬう……」

悔しさを噛み殺すガツシユ。

犯人A「さあて、これからお前をどうしようか……」

アリサ「待ちなさいッ!!!」

その時、物陰からアリサが飛び出した。

アリサ「あなたの狙いはこの私の筈でしょッ！そいつは関係ない！」

明らかにアリサは無防備で危険である。

清麿「ば、馬鹿ッ！何で出てきたんだ！？」

アリサ「うるさい！これ以上は我慢できないのよッ！」

怒鳴るアリサの気迫に清麿は何も言い返せなくなった。

犯人A「確かに……俺が受けた依頼はお前を殺すまでだ。」

アリサの言葉を聞いて冷静になった犯人Aは考えを改める。

犯人A「まあ、仕事は仕事だ。お望み通り……先に始末してやるよ。」

そして、犯人Aはアリサに銃口を向けた。

アリサ「もう……守られてるだけの自分は嫌なのよ！」

張り裂けそうな想いをアリサは涙を流して言い切ると、犯人Aは引き金を引く。

清麿「やめろ ッ！」

アリサSIDE

あの時。みんなで清麿の提案を聞き入れて覚悟を決めた時……正直

言うと私は怖かった。

清磨【まずは爆弾を見付けても絶対に慌てず、慎重に安全な場所へ移動させる。】

でも、清磨から指示を受けて私達は手分けして爆弾を探した。

アリサ「み、見付けた！」

そして、清磨の指示通りに爆弾を安全な場所に移動させ、私は清磨の次の指示を思い出す。

清磨【次に爆弾の解除だ。爆弾の解除方法は9つの解除キーをある順番で打ち込む暗号パズル式。かなり厄介な代物だ。】

はやて【確かに厄介やけど……何で清磨くんはそんなに爆弾の事について詳しいんや？】

私達が抱く尤もな疑問をはやてが代表して訊ねる。

清磨【その話は後にしてくれ。今は時間が無いんだ。】

いかにも時間が惜しそうな清磨に私達はそれ以上の言及はしなかった。

清磨【以前から街で頻発してる一連の爆弾事件は全部で37件。その爆弾の残骸から、いずれも同じ仕組みの爆弾だということが判明した。】

その情報なら私も警察を通して鮫島から聞いた覚えがあった。

清磨【でも、その事件の中には5件だけ爆発前の爆弾が発見されたことがあったんだ。】

でも、その情報は初耳だった。

清磨【当然、警察は爆弾処理を試みた。だが……結果は失敗。爆弾処理を試みた隊員は意識不明の重体が2人。負傷者が3人となった。】

その衝撃的な事実私達の表情は曇る。

清磨【だが、負傷した隊員の証言によると解除キーには共通点があることが分かった。】

すずか【共通点？】

清磨【解除を試みた爆弾の全てのキー配列には、右端の列の中央のマスに“1”と記されてたらしい。】

解除キーの配列

フェイト【でも、それだけじゃ手掛かりが少な過ぎるよ……】

不安が募る私達は地面に視線を落とす。

清曆【いや、そんな事はない。これだけ手掛かりがあれば予想できることがある。】

その言葉に反応して私達の視線は清曆に集まる。

清曆【みんなは世にも不思議な魔方陣の話を知ってるか？】

フェイト【魔方陣……？】

なのは【確か………中国の伝説だよな？】

そして、清曆の問い掛けに首を傾げるフェイトと一般的な知識を確認するなのは。

すずか【うん、そうだよ。その昔、夏王朝の皇帝が黄河の岸边を歩いていたら1匹の亀を見つけたの。】

はやて【その亀の甲羅は9つに分割されとって、何故かそれぞれの枠の中には点が並んどったそうや。】

流石にすずかとはやては昔から色々な本を読んだけあって詳しいわね。

清曆【そして、その皇帝が点の数を観察してみると甲羅の縦・横・斜め………全ての合計は同じ数になる。】

一応、中国の魔方陣については私も最低限の知識は持ってた。でも、

私の知識は精々教科書や参考書に載ってる程度のものだけだ。

清麿【因みに……この話は後に『洛書』と呼ばれる。】

『魔方陣』

方陣とも呼ばれるが、縦・横・斜めはどの方向の合計も同じになる正方形の数の配列である。

清麿【話を戻すが、 3×3 の9マスの3方陣で考えられる数字列は8つしかない。】

一気に選択肢を絞る清麿。

清麿【その中で“1”が予想される位置に来るのは2つ。どちらかの数字順にキーを叩けば爆弾を解除できる。】

さらに選択肢を絞り込んで清麿は私達にそう告げる。

清麿【だが、選択肢を絞り込めることができるのは2つまで。つまり最後は……“運”だ。】

そこで私の思考は目の前の爆弾に戻った。

アリサ「はぁ……簡単に言ってくれるわね。」

目の前の爆弾には清麿の予想通り、解除キーの右端の列の中央に“1”と記されていた。

アリサ「生死は2分の1……」

もし、失敗すれば……

アリサ「……………」

最悪の事態。つまりは爆弾が爆発してしまう光景が私の頭を過ぎる。

アリサ「ふう……………」

私は一つ呼吸を置いて気持ちを落ち着かせる。

アリサ「間違っても恨むんじゃないわよ……！」

強気な発言で自信を付けた私は覚悟を決めてキーを叩く。叩き終わると爆弾は認証を始める。

アリサ「お願い……………」

私は祈るように両手を組んで強く願った。

アリサ「止まって……！」

直後、甲高い機械音を最後に爆弾の電源が切れた。

アリサ「はぁ……………」

その瞬間、精神的疲労と何とも言えない達成感が私の中から込み上げてくる。

アリサ「あ……………」

て言うか喜んでる場合じゃないわ。早く清磨に合図しないと…

アリサ「清磨　　ッ！」

ありがとね……………清磨。

犯人が持つ拳銃が私に向けられる。「怖くない」と言えば嘘になるわね。

アリサ「（だけどね……………目の前に迫る死の恐怖より、大切な友達が自分のせいで死ぬ方が死ぬほど怖いのよ！）」

それに……………

アリサ「もう……………守られてるだけの自分は嫌なのよ！」

アリサSIDE　OUT

清磨「やめろ　　ッ！」

清磨が叫んだ瞬間、一つの魔力弾が的確に拳銃を狙い撃ち、犯人Aの手元から拳銃が離れた。

犯人A「ぐっ……………」

拳銃を握っていた犯人Aの手に痛みが走る。

なのは「もう……………あんまり心配させないでよね。」

フェイト「そうだよ。凄く心配したんだから。」

はやて「まあ……………なんとか間に合って良かったやんか。」

防護服は展開せずなのは達はデバイスのみを起動させて構えていた。先程の魔力弾はなのはが撃つたものであり、犯人Aの拳銃を狙撃したのだ。

はやて「ところで、まだ抵抗する気があるんやったら受けて立つで。」

なのは「でも、これ以上……………私達の友達を傷付けることは許さない。」

フェイト「私達は本気だよ。」

はやてを始めになのはとフェイトも犯行Aを見据えて警告する。

犯人A「どうやら……………俺もここまでのようだな。」

手札を全て失った犯人Aは遂に観念し、両手を挙げて降参した。

- 数分後 -

先程までなのは達を拘束していた縄を使って犯人Aを含む犯人グループ達を縛り上げた。

すずか「はい、これで大丈夫だよ。」

清麿「すまない、助かるよ。」

すずかに腕の怪我の応急処置をしてもらった清麿。

フェイト「この人……1時間毎に誰かに電話してるよ。」

犯人Aから奪い取った携帯電話の履歴をフェイトは調べる。

清麿「所詮、こいつ等は金で雇われただけの人間だ。黒幕は別にいる。」

すると、清麿はフェイトから携帯電話を受け取る。

清麿「最後の勝負だ！このまま一気に黒幕を引きずり出してやるぞッ！」

そして、清麿達は黒幕まで後一步のところまで辿り着いた。

To Be Continued .

第2話（後書き）

今回は清麿の頭脳プレーを主体としましたので、かなりの長編になりました。

内容も1話に収まりきらず、次回に持ち越しとなる始末。

こんな作品ですが……

感想、誤字・脱字、意見、評価などがあれば宜しく願います。

第3話

「比良坂グループ本社」

とある会社の社長室。そこには一人の中年男性が椅子に腰掛けて窓の外を眺めていた。

比良坂「もう……後には退けなくなってしまったな。」

彼の名前は比良坂宗司。バニングス社と同等の規模を誇る会社の社長である。

比良坂「……………ん？」

その時、比良坂の携帯電話に着信が入る。ディスプレイに表示される発信元を確認して比良坂は電話に出る。

比良坂「おい、まだ定時連絡には早過ぎるぞ。依頼は片付いたのか？」

開口一番に不満の意を込めて文句を訴える比良坂だが、返事が無い。

比良坂「返事くらいせんか。小娘達の始末は済んだのかと訊いておるのだ。」

返事が無いことに多少の異変を感じつつ、比良坂は追及を続ける。

清麿『残念だが、あんたの企みは全て潰させてもらった。』

比良坂「貴様……何者だ？」

聞き覚えの無い声に比良坂は警戒する。

清麿『俺の名前は高嶺清麿。ただの中学生だ。』

比良坂の問いに清麿は素直に答えた。だが、その声からは畏れを感じることはない。

比良坂「これは驚いた。この私の計画が中学生の小僧なんぞに潰されたとは………俄には信じられん話だな。」

清麿『そんな御託は必要ない。お互い……無駄な話は省いたらどうだ？』

すると、清麿は怒気を込めて提案した。

比良坂「フツ……良いだろう。どうやら粗方の調べはついておるようだな。」

敢えて名乗りは上げず、比良坂は清麿を試すように訊ねた。

清麿『比良坂宗司。54歳。バニングス社と同時期に設立された会社で比良坂グループ現社長。設立当時は互いに功績を認め合い、競い合うほどの良きライバル関係だった。』

調べ上げた概要を清麿は淡々と述べる。

清麿『しかし、比良坂グループの業績は年々に連なり低下。影では暴力団とも繋がりを持ち、不正の隠蔽や違法取引などにも手を出し

ている。』

比良坂「ほう……中学生にしてはよく調べたな。」

清磨『今時、インターネットを使えば、この程度の情報は幾らでも手に入る。』

比良坂「確かにそうだが、その情報は信憑性に欠ける上に、全ては状況証拠ですら危うい物。私を逮捕する決定的な証拠には欠けておるな。」

清磨『その通り。だから警察も逮捕まで踏み切ることができなかつた。』

余裕を見せる比良坂の指摘を清磨は素直に認める。

清磨『だが、あんたが雇った連中に送られた金の送金元やこの電話の通話記録を調べれば……』

しかし、清磨は確たる証拠の糸口を掴んでいた。

清磨『どうなるかな?』

比良坂に問い掛ける清磨の口調は挑発そのものである。

比良坂「小僧、あまり凶に乗るなよ。私がある気になれば貴様など……」

その時、社長室に一本の内線電話が掛かり、比良坂は平常心を装っ

て内線を繋げた。

比良坂「私だ。悪いが……今は取り込み中なんだ。用件なら後にしてくれ。」

受付嬢「そ、それが警察の方々がお見えに……！」

比良坂「何だと……？」

突然、告げられた受付嬢の言葉に比良坂は声を低くして聞き返す。

清磨「やっと……ご到着のようだな。」

比良坂「どういう事だ……？」

既に比良坂から余裕の表情は消えていた。

清磨「用意周到で……計算高いあなたの事だ。計画が失敗に終われば自分に関する証拠は全て消す。」

比良坂「……………」

清磨「そんな大事な証拠を揉み消されるわけにはいかない。だから、警察が動くまでの時間をこつして俺が稼いだ……という訳だ。」

比良坂の裏を搔き、清磨は全ての策を捻じ伏せる。

清磨「これで、あんに逃げ場は無くなった。」

比良坂「……………」

一方、有り得ない現実に直面した比良坂は言葉を失っていた。

清麿『チエック・メイトだ。』

そして、勝利を確信した清麿はこの勝負に王手をかける。

比良坂「そんな……馬鹿な……」

全身の力が抜けた比良坂は膝から崩れ落ちた。

清麿『最後に聞かせる。何故、バニングスを誘拐して殺そうとした？』

そこで清麿はどれだけ調べても理解できなかった犯行の動機を比良坂に訊ねた。

清麿『確かに昔はバニングス社と関係があつたことは事実。だが、それは数十年ほども前の話だ。逆恨みにしては動機が不十分だと思っぞ。』

比良坂「……………単なる私の自己満足だ。」

清麿『何……………？』

自暴自棄になり、全てを自白し始めた比良坂の返答に清麿は顔をしかめる。

比良坂「バニングス社がその勢力を世界各地に広げ、今に至っては

一流の会社へと世界にその名を知らしめる程までに勢力を伸ばした。」

清麿『……………』

比良坂「だが……………私はどうだ？同じように会社を設立し、世間では一流と呼ばれるまでに上り詰めた。」

清麿『一流……………か。』

いつまでも過去の栄光に捕らわれている比良坂の言葉は滑稽で清麿は違和感を感じる。

比良坂「しかし……………所詮、私の力ではそこまでが限界だった。業績は徐々に落ち始め、どうする事も出来なくなった私は犯罪に手を染めた。」

次第に比良坂は己の未熟さに苛立ちを覚え、携帯電話を握る手に力が入り、小刻みに震えていた。

比良坂「納得できる訳がない。何故……………私がこのような屈辱を味わい、人生を狂わされなければならないのだ。」

厳しい現実を突き付けられ、比良坂は己の人生を嘆く。

清麿『あんだ、やっぱり復讐が目的なのか？』

比良坂「復讐……………いや、これは言うなれば嫉妬だな。私はあの会社が気に入らなかったんだ。だから、潰そうと決意した。」

清曆『そんな自分勝手な理由でバニングスだけじゃなく、関係ない人間を巻き込んだのか？』

比良坂「……………そうだ。」

少し間を空ける比良坂だが、素直に認めた。

清曆『ふざけるなッ！何が嫉妬だ！何が気に入らないだ！自分勝手な都合で他人を巻き込んでんじゃねえぞッ！！』

そんな比良坂に清曆は遂に怒りが頂点に達した。

比良坂「知ったような口を利くなッ！貴様のような青二才なんぞに私の何が分かる！？」

清曆『分かるんだよッ！！』

頭に血が上った清曆が、さらに怒声を響かせて即答した。

清曆『自分の過ちを正当化して自分自身を騙し続ける馬鹿な奴を…
…俺は知ってる。』

頭を冷やした清曆は、先程とは違う雰囲気醸し出していた。

清曆『そいつは毎日が退屈で、生きる意味が分からない人生に飽き飽きしてた。』

そして、清曆の口からは次々と言葉が紡ぎ出される。

清磨『自分以外の存在が鬱陶しくて……目障りで……いつも周りの奴らを見下して……自分の部屋に閉じこもる毎日だった。』

その言葉には重みが感じられ、不思議と比良坂は聞き入ってしまった。

清磨『心を堅く閉ざし……誰も信じられず……世間と自分を隔てる壁を作った。あんたも同じじゃなかったのか？』

比良坂「……………」

凶星を突かれた比良坂は言葉が出ない。

清磨『だがな……そうやって現実から逃げてるだけじゃ何も変わらないことに。一步踏み出せば、今までとは違う景色が見れることに……そいつは気付いたんだ。』

比良坂「今までと違う景色……」

清磨『あんたにも、信じあえる人間が傍に居たら……道を踏み外すことは無かったかもな。』

最後にそう吐き捨てた清磨は電話を切った。

比良坂「フツ……生意気な小僧だ。」

比良坂がそう呟いた直後、駆けつけた警察官の手により比良坂宗司の身柄は確保された。

〈元・第三貨物倉庫〉

清磨「ふう……………」

無事に比良坂との勝負に終止符を打つことができた清磨は一息ついた。

清磨「直に……………ここにも警察が来るから少し休むか。」

そして、事件が無事に解決したことで清磨達は人心地をつく。

フェイト「清磨……………ちよつと良いかな？」

清磨「どうかしたか？」

フェイト「清磨は、最初から黒幕の正体を知ってたんだよね？ここに来る前から。」

清磨「まあな。」

フェイトの問いに清磨は短く答える。

はやて「その辺の事情も詳しく説明してくれへんか？」

すると、はやては警察が到着するまでの時間潰しも兼ねて、清磨から事の経緯を伺おうと提案した。

清磨「まあ、それは別に構わんが…」

時は、今日の午後に清磨とガツシュが図書館を訪れた頃まで遡る。

〈回想〉

ガツシユ「清磨、私は何をすれば良いのだ？」

図書館を訪れて暫く館内を散策していると不意にガツシユが清磨に訊ねた。

清磨「お前は適当に好きな本でも読んでろ。」

ガツシユ「ウヌウ、それでは退屈なのだぁ。」

駄々をこねるガツシユに清磨は頭を悩ませる。

清磨「(はぁ……幾ら何でもこれ以上騒がれては困る。仕方ないけど、あの策を使うか。)」

徐々に人目が集まり始めたことで清磨は予め考えていた秘策を使うことを決めた。

清磨「なぁ……ガツシユ。実はこの図書館には“黄金のブリ”が隠されているんだぞ。」

ガツシユ「何ッ!? それは本当なのか!？」

清磨の秘策。一人で静かに調べ物をしたい清磨はガツシユを別の場所へ誘導することだった。

清磨「ああ、その黄金のブリは味も最高。普通のブリの1000倍

の旨さだそつだ。」

予想通りの反応をするガツシユに清磨はさらに嘘を続ける。

ガツシユ「ならば！その黄金のブリは私が探し出してみせるのだ

ッ！」

単純思考の持ち主のガツシユは大好物の名を聞いた途端、騙されていることに気付かず、凄い勢いで走り去った。

清磨「やれやれ……」

ガツシユの扱いを熟知している清磨は一人になると溜め息混じりの声を漏らす。

清磨「まあ……暫くすれば、諦めて帰って来るだろ。」

結果的に騒ぎは大きく広がってしまったが、当初の目的を果たせた清磨は気を取り直して図書館に備え付けられているパソコンの前に座った。

清磨「まずは周辺情報だな。」

パソコンを起動させて清磨は様々な事を検索する。

清磨「バニングス社。やっぱり想像以上の会社だな。まさか、アポロと同等の規模とは……」

ホームページやネット上に転がる情報を清磨は虱潰しに探る。

清磨「……………ん？」

すると、清磨は気になるページを見つけた。

清磨「これは……………例の爆弾事件の詳細か。」

一連の事件に関する手掛かりになりそうな情報なので、清磨は試しにそのページを開く。

清磨「えっと……………」

そのページには爆弾事件の詳細が事細かく記されていた。

・爆発規模

・負傷者の容態

・爆弾処理を試みた隊員の証言

他にも様々な情報が記されていた。

清磨「厄介な爆弾だな……………」

そう呟いた後、清磨はネット上に書き込まれているコメントを閲覧する。

清磨「特に……………めばしい情報は無しかあ。」

デスクに頬杖をつき、半ば諦め気味に画面のページを下へ動かす清

磨。すると、再び気になる一覽を発見した。

清磨「これは……」

そこには比良坂グループに対する陰口や悪行などが数多く書き込まれていた。

清磨「比良坂グループ……」

清磨は、これら全ての書き込みを鵜呑みにする訳ではないが、疑う材料としては十分だと考える。

清磨「もっと詳しく調べた方が良さそうだな。」

その後、清磨は比良坂グループについて可能な限り調べ、気が付けば二時間が経過していた。

PM 3 : 0 1

清磨「仕方ない。あまり遅くなるわけにはいかないし……今日のところは帰るか。」

清磨はパソコンの電源を切って帰り支度をする。

清磨「ガツシユの奴……どこまで行ったんだよ。」

そう呟きながら清磨は館内を探し始めるのだった。

ガツシユ「黄金のブリはどこなのだ　　ッ!」

清磨「あ……………」

すると、猛スピードで走るガツシュが清磨の目の前を横切る。

清磨「俺は何も見てないし、あんな奴の事は知らん。俺には関係ない。」

それを見た清磨は、ガツシュに背を向け、他人の振りを決め込んで自分に暗示をかける。

ガツシュ「私の……………私の黄金のブリは誰にも渡さぬのだッ！！」

清磨「……………しかし、このまま黙って見過ごすのは流石にマズいよなあ。」

再び暴走するガツシュの声を聞いた清磨は考えを改め、苦渋の決断をする。

清磨「はあ……………作戦失敗だ。」

数分後

清磨「本っ当に！スミマセンでしたッ！！」

頭に大きな瘤こぶを作ったガツシュを小脇こわきに抱え、清磨は深々と頭を下げて謝罪していた。

職員「はあ……」こは図書館ですよ。責任を持って子供の面倒を見てもらわないと周りの皆さんが困ります。」

清磨「はい……」

警備員「はあ……はあ……はあ……こ、この子を捕まえるのには結構苦労したよ。」

清磨「はい……」ご迷惑おかけしました。」

静寂をマナーとする図書館で騒いだため清磨が厳重注意を受けたのは別の話である。

〈回想終了〉

清磨「……」と、言う訳だ。」

これで今回の事件に関する全ての概要が明かされた。

アリサ「ねえ、清磨……」1つだけ聞いても良い？」

清磨「ん？」

ところが、アリサには一点だけ腑に落ちないことがあった。

アリサ「どうして……昨日今日会っただけの私なんかのために色々調べてくれて、増してや危険を冒してまで私達を助けてくれたの

……？」

すると、清曆は小さく笑った。

清曆「昔、似たような質問をされたことがあるよ。」

そこで清曆は魔物同士の戦いで出逢った小さな女の子の姿を思い出す。

清曆「なんで……なんで助けてくれるの！？」って。」

アリサ「もしかして……」

何故だが、アリサには不思議とその質問の主が誰なのか想像できた。

清曆「そう……ティオだよ。」

昨日に続いて清曆の口からティオの名が登場する。

清曆「俺達が初めてティオと出逢った時……あの子の心は酷く傷付いてた。」

そして清曆は最初に受けたティオへの印象を語り始めた。

清曆「どんなに辛くても自分の気持ちを押し殺して強気に振る舞う子だった。」

淡々と語る清曆の言葉がアリサの心に突き刺さる。

清曆「今では明るくて元気な女の子だけど、幼くして辛い経験を重ねていたんだ。バニングスにも、そんな経験があるんじゃないのか？」

アリサ「それは……………」

清曆の言葉に対して、アリサは返す言葉が無かった。

清曆「バニングス……………お前、我慢してたんだろ？」

アリサ「え？私が……………我慢？」

清曆「そうだ。自分のせいで友達や大切な人間を危険に巻き込むことが怖くて、辛いことも自分の中に押し留めて我慢してたんじゃないのか？」

アリサ「ッ!!」

その言葉でアリサは自分の本心に気が付いた。

清曆「でも……………もう我慢する必要はないんだ。今のお前は1人じゃない。」

そこで清曆はさらに大切なことをアリサに教える。

清曆「辛い時には必ず支えてくれる。」

まず、清曆はフェイト・T・ハラオウンに視線を向ける。

清曆「悲しい時には優しく励ましてくれる。」

続いて、清曆は八神はやてに視線を向ける。

清曆「嬉しい時には一緒に喜んでくれる。」

次に、清曆は高町なのはに視線を向ける。

清曆「いざという時には誰よりも頼りになる。」

そして、清曆は月村すずかに視線を向ける。

清曆「そんな存在が……お前にはある。」

やがて、清曆の視線はアリサに戻る。

清曆「お前には、心から信じられる友達がいるじゃないか。」

アリサ「あ……………」

最後に「俺も含めてな。」と付け足して清曆は笑いかける。

アリサ「（そっか……………私、我慢してたんだ。）」

自分でも気付かなかった心の傷を清曆に指摘され、嬉しさと安心感が込み上げる。

アリサ「う…う…ぐすつ…」

すると突然、アリサは清曆の目の前で涙を流し始めた。

清麿「え、ええ　　ッ!? 何で泣くんだよ!? 俺、なんか悪いこと言ったか!？」

突然、涙を流すアリサを見て清麿は慌てふためく。

アリサ「ぷっ……………あははッ! 馬鹿ね……………そんなんじゃないわよ。」

そんな清麿の様子にアリアは思わず笑いが込み上げた。

ガツシュ「ウヌウ……………アリサ殿は泣いたり笑ったりして、一体どうしたのだあ?」

その様子を見ていたガツシュが首を傾げて呟く。

すずか「多分……………嬉しいんじゃないかな。」

頭の上に疑問符を浮かべるガツシュにすずかが答えた。

ガツシュ「嬉しい……………とな?」

すずか「アリサちゃんはね……………昔から強気で、誰にも弱みを見せることはなかったんだ。」

ガツシュ「ウヌウ……………そうなのか?」

すずか「うん。それに今日だって私達を庇って犯人達に抵抗して……………命まで張って。」

清麿とアリサの遣り取りをまるで母親のように眺めるすずか。

すずか「正直、私としてはアリサちゃんの事が凄く心配で……危ない真似はやめてほしかったよ。」

アリサの親友として。いや、親友以上の想いを込めて、すずかは本心を述べた。

すずか「でも……本当はアリサちゃんも怖かった筈なの。それは事件が解決した今でも変わらないと思うんだ。」

そして、すずかはアリサの気持ちを代弁して本音を零す。

すずか「そんな時に清磨くんが掛けてくれた言葉は心強くて……優しく……温かかしくて……きつと嬉しかったんだよ。」

ガツシュ「ウヌウ……よく分からぬのだ。」

すずか「あはは……ガツシュくんには少し難しかったかな。」

理解が及ばないガツシュに視線を移してすずかは苦笑いする。

すずか「そうだねえ。ガツシュくんにも……いつか分かる時が来ると思うよ。」

視線をアリサに戻してすずかはそう告げた。

ガツシュ「ウヌ……やっぱりよく分からぬのだ。」

結局、ガツシュの頭の上からは最後まで疑問符が消えることはなかった。

清曆「まったく……何なんだよ。急に泣き出したと思ったら、今度は急に笑い出しやがって……」

アリサ「……………」

漸く落ち着いたアリサを見て清曆は愚痴っぽく呟いたが、アリサは全く反応を示さない。

清曆「バニングス？」

そんなアリサを不思議に思った清曆がもう一度呼び掛ける。

アリサ「……………アリサ。」

清曆「えっ？」

アリサの呟く程度の声に清曆は反応するも聞き取るまでには至らず、咄嗟的にもう一度聞き返す。

アリサ「名前ッ！これから私の事は名前で呼びなさいって言うてんのよ！／＼／」

すると、顔を赤面させたアリサが大声で言い切った。

はやて「あ、アリサちゃんだけ名前やなんてズルいで。」

なのは「そうだね。いつまでも他人行儀って言うのは私も嫌だし……何より名前で呼び合うことは友達の証なんだよ。」

フエイト「わ、私も、きつと名前で呼び合った方がもっと仲良くなれる気がするんだ……／＼／＼」

すずか「私もそう思うなあ。」

アリサに続いてはやて達も暗に「自分達の事を名前で呼べ。」と諭す。

清磨「（つまり……名前で呼べば良いのか？）」

聡明な清磨はすぐに全員の意図に気付いた。

清磨「なら、みんなの事は名前で呼ぶことにするよ。」

はやて「決まりやね。」

その時、数台のパトカーのサイレン音が徐々にこの廃倉庫に近付いてくる。

清磨「ちようど警察も来たみたいだし、これで一安心だな。」

警察の到着が間近となり、清磨は漸く肩の荷が下りた。

アリサ「ところで……清磨とガッシュは大丈夫なの？」

そんな清磨にアリサが問い掛ける。

清磨「ん？腕の怪我なら心配ないぞ。」

ガツシユ「ウヌ、私も大丈夫なのだ。」

アリサ「そうじゃなくて……ガツシユの電撃の事よ。」

この世界では魔法は秘匿事項。つまり、当然の如く魔物の力を持つガツシユの電撃も秘匿中の秘匿なのである。

なのは「私達も一般人に魔法を見られちゃったし……」

フェイト「流石に誤魔化すのは難しいよね……」

次第に、なのはとフェイトの表情が険しくなる。

清曆「その心配は無い。」

その言葉に反応して全員の視線が清曆に集まる。

清曆「奴らが何を言おうと、電撃や魔法なんて非現実的な供述を警察がまともに取り合うことはないさ。」

拘束している犯人グループ達を後目に清曆は断言した。

はやて「なるほどなあ……」

すずか「確かに……それもそうだね。」

そして、通報を受けて駆けつけた警察官達により誘拐犯一味は連行され、清曆達の事情聴取は本人達の疲労状態を考慮されて後日となった。

くバニングス邸く

PM6:40

バニングス家に遣える運転手の鮫島の迎えで無事に帰宅したアリサは今日一日の疲れを癒すために入浴していた。

アリサ「はぁ……今日は散々な1日だったわね。」

ちょうど良い湯加減の大きな浴槽に浸かるアリサは今日の出来事を思い返す。

アリサ「……………」

【自分の過ちを正当化して自分自身を騙し続ける馬鹿な奴を……俺は知ってる。】

【そいつは毎日が退屈で、生きる意味が分からない人生に飽き飽きしてた。】

【自分以外の存在が鬱陶しくて……目障りで……いつも周りの奴らを見下して……自分の部屋に閉じこもる毎日だった。】

思い返されるのは清麿の言葉ばかり。それらの言葉からアリサは一つの疑問を抱く。

アリサ「もしかして……あれは清磨の……」

比良坂との電話の際に語られた人物は清磨自身の過去。その事をアリサは薄々感づき始める。

アリサ「でも、これ以上の詮索は……野暮ってもんよねえ。」

だが、これ以上の他者への詮索は明らかに人間としての領分を越えていると判断したアリサは潔く詮索を中止した。

アリサ「そう言えば……」

ふと頭に浮かんだことは、またも清磨の言葉。

清磨「今では明るくて元気な女の子だけど、幼くして辛い経験を重ねていたんだ。バニングスにも、そんな経験があるんじゃないのか？」

そう訊ねられ、自分は何一つ答えることが出来なかった。それは肯定を意味している。

アリサ「“辛い経験”……というより私の場合は“思い出”かしらねえ。」

そして、自分の記憶を遡る。

アリサ「確か……あれは私達が小学1年生の頃だった……」

目を閉じて意識を過去の記憶に集中させるアリサ。

アリサ「あの頃の私は、我ながら最低な子だったわね。自信家で…
我が儘で…強がりです…」

幾ら当時は幼い子供だったとは言え、今のアリサには過去の愚かさ
と未熟さが身に染みて理解できる。

アリサ「そんな性格だったから友達なんて1人もいなかった。心が
弱かったから………いつも独りぼっちだった。」

独り言を続けるアリサ。辺りは物静かで、水が滴り落ちる音がやけ
に響く。

アリサ「そんな時だったわね。私がすずかとなのはに出逢ったのは
………」

一時の沈黙。そして、一滴の雫が浴槽に落ち、そこから波紋が広が
った。

【痛い？でも大事な物を取られちゃった人の心はもっともっと痛い
んだよ。】

アリサ「それから……私、なのはと大喧嘩して、それをすずかが止
めてくれたんだっけね。」

すると、アリサの脳裏には小学1年生の時に言われた言葉。高町なのは言葉が蘇る。

アリサ「すずかの勇気のお陰で私達は仲直りできた。なのはの優しさのお陰で私は変わった。」

…………… 2人の親友のお陰で。」

普段は強気で素直になれないアリサだが、感謝の気持ちは心にあるのだ。

アリサ「それで私達は友達になれたのよね。小学3年生の頃には……フェイトや、はやくとも友達になれたっけ……」

それと同時に魔法の事情を打ち明けられ、より親しい関係を築き上げたのだ。

アリサ「友達……………かぁ。」

天井を見上げてアリサは呟く。

アリサ「清磨って……………かなりお人好しみたいのよね。おまけに他人のためなら平気で無茶するんだから。心配することちの身にもなりなさいよ。」

そして、清磨に対して愚痴を零すアリサだが、その表情は穏やかである。

アリサ「まったく……………あんな奴に出逢ったのは初めてよ。」

清磨の事を考えながらアリサは小さく笑った。

アリサ「あれ？さつきから私……清麿の事はつか考えてる？」

その事に気付いたアリサの顔は徐々に紅潮する。

アリサ「ち、違っッ！私は別に清麿の事なんか……！！！！」

まるで自分に暗示をかけるように声を張り上げるアリサ。

アリサ「でも……きっと清麿は私の……私達のために、あそこまで怒ってくれたのよね。」

電話越しではあったが、比良坂相手に堂々と啖呵を切り、怒鳴り散らす清麿の姿を思い出して一言呟いたアリサに少しの沈黙が訪れる。

アリサ「は……ッ！ち、違ッ！わ、私は別に清麿の事を考えてたんじゃ……！！！！」

己の恥ずかしい失体に気付き、一人で悶々と喚くアリサはこの上なく赤面する。

アリサ「もう……なに考えてんのよ。私の馬鹿あ……！！！！」

清麿の事が頭から離れないアリサは、赤面する顔を隠すように浴槽の中に沈むのであった。

くハラオウン家く

フェイト「ただいまあ……………」

壮絶な一日を過ごしたフェイト達は日が沈んだ頃に漸く帰宅することができた。

清磨「今日は疲れたな……………」

ガツシュ「ウヌウ……………」

そして、途轍もない疲労感が清磨達を襲う。

リンディ「みんな……………お帰りなさい。」

そんなフェイト達をリンディは優しく出迎えた。

リンディ「清磨くん、警察の方から話は全部聞いたわ。フェイト達を助けてくれて……………本当にありがとう。」

深々と頭を下げて、リンディは感謝の言葉を述べる。

清磨「あ、頭を上げて下さい。リンディさん。」

そんなリンディを見て、心苦しく思った清磨が言葉をかける。

清磨「俺は運が良かったに過ぎません。それに……………俺一人の力じゃ何も出来ませんでした。」

そう言って清磨はガツシュの頭の上に手を置く。

清麿「今日、ガツシユは本当によく頑張ってくれました。ガツシユが居たから、みんなを助けることが出来たんです。」

そう謙遜の言葉と共に清麿はガツシユの頭を撫でる。

リンディ「（仲が良いというか……彼らは強い絆で結ばれてるみたいね。）」

その光景を見てリンディは二人の絆の強さを聡明に理解し、ガツシユの目線に合わせるようにしゃがみ込む。

リンディ「ガツシユくんも、本当にありがとね。」

ガツシユ「ウヌ、どういたしましてなのだ。」

その時、空腹を知らせる腹の音が玄関に響き渡り、その音の出所に全員の視線が集まる。

ガツシユ「ウヌウ……それより私はお腹が空いたのだあ。」

音の出所であるガツシユは空腹を訴える。

リンディ「そうね。清麿さんとフェイトもお腹空いたでしょ？すぐ夕食の準備をするわね。」

夕食を取るために皆はリビング格に向かう。

アルフ「フェイト　　ッ！」

リビングに入ると凄い勢いで子犬形態のアルフが涙を流しながらフエイトに抱き付いた。

フエイト「アルフ……………ごめんね。心配かけて。」

アルフ「うわああああん！」

安心したアルフは一気に気持ちが爆発して、さらに号泣する。

リンディ「ねえ、清磨くん。夕食の前に大事な話があるんだけど…

…良いかしら？」

清磨「俺に……………ですか？」

そして、清磨はリンディから包装された大きめの箱を手渡される。

清磨「あの……………これは？」

リンディ「開けてみて。」

言われるがままに清磨が箱を開けると、中には一着の男子用学生服が入っていた。

清磨「これって……………」

フエイト「あ、その制服……………私達の学校の制服だよ。」

それを見たフエイトが清磨に教える。

リンディ「まだ清磨くんは中学生だし、学校には通ったほうが良い

と思うの。」

フェイト「もしかして……母さんの用事って清磨の転校手続きを取ってたの？」

ガッシュ「ということは……清磨はフェイト殿達と同じ学校に行くのだな。」

リンディ「まあ、清磨くんさえ良ければ……だけどね。」

リンディだけでなくフェイトとガッシュも清磨の返答を待つ。

清磨「あの……良いんですか？居候させてもらってる上に学校まで……」

リンディ「遠慮する必要はないわよ。そのために転校手続きを済ませただけだから。」

遠慮がちに訊ねる清磨に対してリンディは快く了承した。

清磨「……………」

現在の情報と今後の活動方針を考慮して清磨は真剣に考える。

清磨「（時間はあるんだ。元の世界に戻る方法が見付かるまで、フェイト達と学校生活を過ごすのも悪くないかもな。）」

そして、答えを出した。

清磨「それじゃあ……お言葉に甘えさせてもらいます。」

未だに元の世界へ帰る手立てが無い清磨は素直にご厚意を受け取ることにした。

リンディ「分かったわ。明日は土曜日だから週明けからフェイト達のクラスメートよ。」

清磨「はい、宜しくお願いします。」

こうして清磨の私立聖祥大付属中学校への転校が決まった。

To Be Continued .

第3話（後書き）

この度、更新が遅れて誠に申し訳ありません。流石に小説の掛け持ちには苦労しています。

今回は少し内容量を詰め込み過ぎた感があります。

ですが、前半のシリアスな展開とアリサフラグの確立、並びにテイオのキャラクターを被せた結果ということをご理解頂けると幸いです。

感想、誤字・脱字、意見、評価などがあれば宜しく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0467w/>

魔法少女リリカルなのは ~ 金色の魔物と天才少年 ~

2011年11月16日11時48分発行